高師直
鹽冶判官

太平記忠臣講釋

高師直　鹽冶判官　太平記忠臣講釋

座本　竹田文吉

地目出度君の御威勢。詞營宮高塀道具どめ。乘物下馬のもり砂も。地巖とならん鎌倉御所出仕。フシ登城の乘物先。地所せき迄進物臺つみならべてひかゆれば。藥師寺治郎左衞門聲をかけ。詞途中の目見へ苦しかるまじ。御對面なされよと。地乘物立つれば立出る時の出頭高武藏守師直。家來を遠ざけ近く〳〵。詞そち達はいづれの家來ぞ。ハア桃井播磨守河野大炊之介家來共。いづれも此度。饗應司の役目。委細御傳授に預り。身の大慶是に過ず。寸志の御禮輕少ながら。黃金百枚丼に卷絹。御受納下され候はゞ有がたからんと相述る。是は〳〵。夜前といひ今日と申叮寧の御禮。此上ながら隨分と御差圖申さふ。後刻營中にて貴意得んと。傳へてくりやれ。其進物は苦勞ながら。直に身が屋敷へ持參仕やれ。大義　地々々とほや〳〵顏。フシ兩使は悅び立歸る。詞ナント藥師寺殿御らふじたか。此度の勅使儀。大切の規式格式を存知たは師直一人。指圖を受る禮としてそれそれの心付。かうなふては叶はぬ所。其中に第一の役人鹽冶判官。こやつ大の馬鹿者。其くせ吝嗇者と見へて。是程の大事を賴むに或は桑酒。千肴樣の送り物。師直を踏付た仕方。成程左樣。じたい彼奴か日比から仁義立が氣にくはぬ。殿中で大恥かゝせ。地重ての見せしめになされ。そこはぬからぬ。夫故に何事も傳授致さず。詞ヤアあれ〳〵。あれへ來るは鹽冶と見へた。其元は先登城。地萬事は後程。然らば先へと立別　フシるゝ間もなく。地伯州の城主鹽冶判官高貞。家來矢間十太郎に菓子折一籠取持たせ。詞夜前お屋敷へ推參の所。御不快と有故氣づかはしく。今朝早御見舞申せしに早御登城。御氣分あしきに御勸御苦勞至極と　地挨拶に。指出す進物じりと。詞鹽冶殿醫。枕が上らいでも。お上の御用怠る樣な師直ではござらぬ。

菓子たべたければ手前にも所持致す。左樣の賄賂受けて。式法御傳授致す師直と御らうじたか。是は〳〵左樣ではなけれ共。諸事お引廻しに預れば畢竟拙者は門弟。師を重んずる志計。地お氣にさはらば御用捨なされ。此度の役目何とぞ首尾能勤る樣に。御指圖下さるべし。詞例年の格式は。今日御對顏明日お能有るべき所。當年は格別の御沙汰。今日直にお能有る由。第一心得ぬは衣服の義。烏帽子素袍着用致してよからふや。御能御配膳の爲には。殿斗目長袴たるべきや。いづれ共御指圖希ひ奉る。地此義はいかゞ仕らん。師直公々々々と。いへど一言答へもなく。詞ハア昨日我君より仰付られし御用は一ツは是よ。今一ツは何やら。ヲヽ夫よ大事の御用。家來共早供せよと。地乘物に。のらんとすれば申し〳〵。詞只今お尋申した義を。ハテ扨。其くらゐの事は尋いでも大方しれて有る事さ。夫程不案内ならば。なぜ夜前にも尋めされぬ。イヤ其爲にお屋敷へ參りしかど。御對面なされぬ故。アヽコレ〳〵何かといふ中大切の御用が延引。家來共早いそげと。地詞にちりもはい〳〵〳〵乘者いそがせ フシ別れ行。地十太郎は血氣の若者。詞申し殿役目を甲にきれば迚餘りの無體。こりや師直が心に一物。アヽコリヤ〳〵麁相いふな。我儘無禮は生れ付。此役義仕課せる迄は。臀脚をもたせても。堪忍を守らねば勤めかたき大事の前。短氣の行跡仕るな。地此上は登城の上折入て指圖を受けん。詞最早勅使も御入の刻限近しいざ來れと。地事を慎む大名風。胸に餘境は有明のあくる御門や。三重地大樹足利直義公。緋の御裝束白書院。上段の御座に蕭御有。わざと褥は敷給はず。勅使葛城大納言。御太刀目錄御馬代宣旨の趣述給へば。地謹んで頂戴有。師直是を受取て御床に納置。續て院使女御の進物。勾當の内侍より。中高十束御獻上師直 フシ下段の敷居より。地判官々々と呼はれ共。答なければ猶聲高。詞判官は何して居めさる。早來られよ判官。〳〵と迫々に。地呼立られて鹽冶判官。素袍烏帽子も取あへず フシハツ〳〵と畏る。詞ハテさて〳〵〳〵何故の遲參。東宮攝家内侍方の獻上物。御納戸へ納められよ。早く 地〳〵といふ顏も。にがり切たる不機嫌顏。諸士の手前の恥辱より。君の御氣色いかゞぞと恐れ入たる。フシ役目の大事。地勅使は下段

に座を改め。自分の御禮御挨拶。早御對顏事終れば殿上の間へ フシ對座有る。地溜の間より出來る。藥師寺がしたり顏。詞武州公出來ました。何が鹽谷めが。貴公のお指圖がないから。諸大名の裝束を見て俄の轉倒。烏帽子素袍着替る時のあはてざま。夫故遲參で先一つ不首尾の初り。ヲヽサ〳〵是から又仕樣は段々。今日のお能は例格の外俄の規式。うろたへさがすを見る樣なと。地默き囁く侯人の。工としらぬ鹽治判官。フシそれと二人が立て行。地のふ〳〵武州殿。暫くと呼とめ。詞勅使方へ御進物。先達て我等御使の由。いまだ御沙汰是なきや。存じ申さぬ。左樣の事を今比に尋て事が濟ますか。師直は御前の御用が多い。其元に物申てをる間がござらぬと。地ふり切奧へ行過る。地フシ跡打ながめ。詞ハテ心得ぬけふの振廻。事むつかしきは日比の氣質と思ひしが。最前の詞といひ。全く我に恥辱をあたへん結構と覺たり。地ヱヽ一生の浮沈何とせんと無念に心かきくるゝ。折から藥師寺聲高く。詞鹽治殿々々々。お能の場所へなぜお出なされぬ。大廣間へ早く〳〵。ナニ勅使には殿上の間に御休息と存ぜしに。早お能が始つたか。始つた段かモウ中入前。ハツ是は〳〵然らば衣服を改めて。ハテ御用が有る先早くと。地せつく詞の中の口。矢間が持てくる間もなく。詞衣服は跡でマアござれと。地無理に フシ引立て走り行。地十太郎は心ならず。ヱヽ今少し遲かりし。お上の首尾はいかゞぞとあんじ煩ふ主思ひ。奧を見やつてとつ置つ心をあせる書院先。思ひ有げに判官は。フシ廣間を下る後の襖。ぐはらりと明けて高の師直。詞いかに作法をしらねば迚。お能の場所へ素袍ゑぼし。アア不調法千萬。假令身共が傍に居たればこそ。勅使へ無禮君への不屆。夫では萬事思ひやらるゝ。其元の樣な愚鈍者にゑぼし裝束は。正眞のだちん馬に唐鞍置た樣な物。嗜つしやい〳〵。去とは馬鹿では有るはいと。地惡口聞兼十太郎。反打かくれば。詞コリヤ〳〵〳〵身共が誤り有ればこそ。師直殿のおしめしなさるに推參な若輩者。陪臣のくる所でない。下りおらふと睨付る。地主も家來も堪忍情。胸を フシさすつて立出る。詞イヤ早仰の通り不調法な判官。何卒とくと御傳授有て。饗應の役目首尾能相勤る樣に。サア師直に如在はない。隨分心を付めされ。早お能も中

入。配膳の用意々々。地アツと答も心せく。虫をおさゆる長廊下。權威を高の師直が。きめてくれんと口なめずり。胸の獻立七五三。フシ用意に時こそ移りけれ。フシすでに御膳の刻限と。鹽冶判官高貞長上下のしづ〳〵と。給仕の膳部フシ目八分。地師直見るより。詞コレ〳〵待つしやれ判官殿。こりや何じや。勅使の御膳は三方。本膳の料理も違ふて見ゆる。こりやコレ紅葉の間の饗應。殿上人の膳部。ハテ扨々麁忽千萬。イヤ先達て斯の通り貴公より御差圖。ハテ扨馬鹿な。身共が何の其樣な麁相申してよい物か。我誤りを人にぬる。愈以て不屈至極。じたい又人に物を習ふにはそれ〳〵の禮義といふ物が有る。其禮義のすべさへしらず。事知自慢で自分計らひにやらるゝから。最前の樣な不調法。一度ならず二度ならず。左樣な事では所詮饗應司は勤らぬ。最ふ用事はない立つしやれ。早く歸つて休息めされと。地膳部をはたと打落し席を蹴立てかけ入たり。料理もさんらん氣は狂亂。堪忍の二字今こゝに。家の斷絶時來りし。是非もなし是迄なり。儕師直遁さじと胸をフシ定めて入給ふ。地斯とはしらず石堂右馬之丞。柳の間の取持に心を付くる年ばい役。緣を折から聲々に。スヘ事こそと御殿の騷動。大名小名行違ひ。詞殿中に口論有めい めい詰所をかためよと。地いふ聲次第に聞傳へ入亂れたる。三重へさはぎなり。地大下馬先には諸方より馳來る人馬の音。中にも鹽冶の屋敷よりかけ付る大星力彌。向ふに石堂縫殿之助馬フシ乘放し行合たり。詞力彌でないか。縫殿之助樣。殿中の騷動いまだ誰共相知れ申さず。心元なきは主人の身の上。ヲ、サ我も氣づかはしく。早馬にてかけ付たれ共御門を打て人を入れず。地ヱ、羽がなほしやと高築地。遙に見上て立たる折から。御門開いて網乘物。警固は石堂右馬之丞。フシさも嚴重に出來れば。詞ヤア親人。殿中の喧嘩は誰々。承はつて落付たし。ヤアさはがしい縫殿之助。譬此石堂が體に過有迚も。お上にさへ虚事なければ驚く事少しもない。既に事治つた上立騷ぐは上への無禮。地屋敷へ歸れと云捨て。フシ乘物いそがせ歸らるゝ。地何國迄も主人の供と。狂氣の如くかけ出るは。詞ヤア十太郎か。喧嘩の樣子心元なし。主君の身の上いかに〳〵。ヲ、喧嘩の相人は高師直。主人に重る恥辱をとらせ。元よ

り短慮の破れ口。勅使の御前もお厭なく。只一刀に切付給ふ。御尤とは言ながら。御身の大事と成たはやい。シテシテ師直は御仕留なされしか。サレバ御讐憤のかいもなく。敵は僅のかすり疵。我は御前に有合さず。直に御殿へ切込んとは思ひしかど。猶々主人の罪重らんと。拳を握て指控ゆる。口惜さを推量せい。ナヽ何といふ。すりや今の網乗物が御主人で有たか。地いで追付んとかけ出す。詞ヤア判官が家來共。そこ動くなと聲をかけ。地網代の乗物びゝしくも。引添出る治郎左衛門。詞ヤイそこな扶持離れ共。耳をさらへて承はれ。鹽冶判官殿中を憚らぬ狼藉。不屆至極に思し召され。罪科は追て先御預。又師直殿は上を憚り。柄に手もかけられぬ神妙の仕方。御感心斜ならず手疵保養。御典藥迄お付なされ。只今歸館なさるゝはい。地ヤア其乗物がとかけ寄る三人。詞ホヽウナント無念なら浪人共。コレ縫殿之助。御邊は石堂の養子なれど元は鹽冶が弟。どふ梟がこふも知れまい覺悟お仕やれ。浪人共此乗物に指でもさすと。彌鹽冶は重罪人。手向ひするか。サア夫は。サア〳〵　地何とゝ廣言惡口。手指もならぬ時の權。齒を喰しばつて立歸る。無念成ける。三重八次第なり

第二

地堪忍の文字は貴賤の寶なれ共。時によつては止事を鹽冶判官高貞。一旦の短慮にて鎌倉にて御身の災ひ。しらぬお國の御城内家中集りざゝんざやら。フシ舞つ諷ひつ酒機嫌。地小寺重平竹森喜多八。庭の梁で武藝の勵。其爭ひぞ君子なる。當り〳〵と矢取がかけ聲。一手々々に古實の射法。一寸二寸のかけ的より。心づかひに　フシ仇矢なき。地大星由良之助の内室。フシ屋敷模樣の襠もじみな家老のおかもじ風。妙引連一間を出。詞是は〳〵小寺樣竹森樣。御酒宴の座敷をはづしてよい手な仕樣。したが靜謐な御代に。武藝のお心がけは御奇特。ホヽホヽヽ。わたしも座敷であなたこなたのお間をして。地詞多きは酒機嫌お赦しなされて下さりませと。家老の妻の顔もせず。詞を廻す

發明は。實にフシ大星の室家なり。詞是はお石樣の悼入たる御挨拶。此喜多八も御酒が過て醉醒しの弓のけいこ。わたしは常々一すいも給ね共。大星樣のお饗で。重平が腸は酒漬。ヲヽ氣疎。忠義でも不忠でも。まさかの時でなければ。武士の腸ぜんさくは切腹の時。不吉な事おつしやれずと。サア〳〵早ふお座敷へと。地詞半へ奏者番。詞只今御家老の九太夫樣。お金役三左衞門樣。御登城と訴ふれば。ヲヽ其通り申上ふ。竹森樣小寺樣と。地打連奥にフシ入る間もなく。地相家老弁九太夫。家中でばりつく麻上下。のつし殿斗目の人體年ばい。跡に續て金役早野三左衞門。玄關よりフシ入來れば。地しらせに出向ふ家老職大星由良之助。祝儀の上下さはやかに出立。詞是は〳〵九太夫殿三左衞門殿早速の御登城御苦勞候。イヤもふ拙者より。御亭主役の由良之助殿。嘸お心づかひ。早朝より登城致す筈なれ共。悴定九郎は鎌倉へ參勤のお供。去によつて一人の孫めが。祖父を廻して放しませず。見れば又憎くふもござらず。漸く三左が見へまして同道を仕つた。成程九太夫樣のおつしやる通り三左衞門が悴勘平。不屆ござつて殿の御勘當なれば。寢覺にも思ひ出しまするは子が不便さ。ヲヽ成程親心では尤。扨此間も申通り。此度年始の御勅使鎌倉へ御下向によつて。殿樣と桃井播磨守樣。饗應司の役目を蒙り給ふは。殿の譽御家の規模。地急度悦び奉れとの御意下り。詞去十一日より十四日迄。饗應の御役目相濟と存じ。今日一家中打寄殿樣よりの御酒頂戴。最早諸役人はお成の間で酒宴最中。ア謠ます舞まするとの。由良之助聞耳立て。詞玄關の番人參れ。聞ば御城内に大勢の人聲は何事成ぞ。されば只今大手の御門に。凡三尺計の蜂の巣有。山蜂一疋飛來つて巣の邊を飛廻りしに。彼蜂の巣より小蜂多く飛出。山蜂を差殺す間もなく。數萬の山蜂群り來つて。小蜂を殘らず差殺し飛去候。是を見る人珍事なりとて群集仕候と申上れば。地是はふしぎと兩人も何とフシ評する事もなし。地由良之助も蜂の戰ひ。胸に當れどあらぬ體。詞それはあやしき事ならず。蜂の戰ひ蛙の合戰。山林水邊にはまゝ有る事。蜂の中にも尾に毒なきを蜂の頭とする。其蜂小蜂に差殺されたるによつて。山蜂怨を報ふと見へたり。蜂は元來節義を守る虫なれば。嘸あらん。是を思へば

人として。忠孝なきは彼蜂におとつたり。侍は猶以て蜂こそはよき鑑と。地未然を察する由良之助後に思ひ合すれば。扨こそ蜂の戰ひも。鑞冶の家に災の。フシ其前表としられける。地九太夫はにた〳〵笑ひ。詞ヲ、御家老の講釋承はつて忝とく致いた。したが。虫も生有る物故出頭をそねみ。差殺した物であろ。ホ、ホ、ヲ、おつしやる通り人でも虫でも心がなくば論に及ばず。一寸の虫に五分の魂。とかく世界は虫を死すが武士の嗜み。サア九太夫殿。三左衞門殿。先々奥へ。然らば左樣仕らん。老人の遲參御免有れい。いざ三左衞門　地來られよと　フシ打連てこそ入にける。地奥は祝義の聲高々。ウタイ君はちよませ〳〵と。壽を祝ひ納めても。胸おさまらぬ由良之助。蜂の戰ひ氣がゝりと。工夫をフシ廻らす時計の一間。地辰巳角の櫓の遠見あはたゞしく。詞鎌倉より早打と見へ。御城の馬場先を押來り候と申上れば。地吉凶いかにと由良之助縱に立出。今や〳〵と待間程なく。數多の人歩。乘物手玉につき〴〵もすた〳〵息。しらすにフシ乘物舁居れば。地由良之助聲をかけ。詞早打に來りしは悴力彌。女房參れ。息次に水一口。早く樣子が聞たしと。地父の詞に腹帶ながら。力彌しらすにおり立て。今日の早打は殿樣の御大事。はつと驚く由良之助聲はり上。詞鎌倉より凶事の早打來つたり。諸士の面々參つて。子細を聞れよと呼はれば。地酒宴の席も俄に散亂。斧早野竹森小寺其外諸役人。追取刀でかけ出〳〵。子細はいかにフシとせき立れば。地力彌息をつきあへず。詞されば殿樣饗應司の御役目。十一日より十四日迄首尾能お勤遊ばされ。白書院にて勅答の規式有る所。高野師直執權の職に誇り。殿へ不禮有しと見へ。殿中にて師直を双傷に及び給へ共。双方共に御存命。網乘物にて御城より御預と成給ふ。夫より直に馳參じ候故。跡の子細は存ぜず候。地追々く注進御座有べしと。色を變じて述ければ。並居る諸士はつと仰天。母は力彌の傍により。詞そなたも嘸驚き。定て心がつかれうに。よふ早打におじやつたのふと。フシ背撫さすりいたはれば。地父は力彌をはつたとにらみ。詞かゝる主君の御大事に。何迚注進延引せし。不屆な悴め。我目通りへは叶はぬ立てうせふと　地怒の面色。ハアはつと計に詮方も。力彌は案に相違して。フシしほ

しほ立て入にける。詞是は又心のない父御のお呵。我子を贔負するではなけれど。町人であの年なれば。手跡のけいこ最中。鎌倉より此伯耆迄二百里餘り。五日半に來りしは出かしおつたと譽はなされいで。遲い迚お呵は。殿様の事聞て。當惑故と存じます。九太夫様は御老體お前が狼狽なさると一家中は闇。地コレ氣を慥に遊ばせと。諫る妻を見向きもせず。詞只今力彌を注進遲しと呵しは。彼殿の御大事を聞より。我々に告しらさんと思ふ一念にて。二百里を五日半はよの常ならず。ヲ、悴早かりし出かしたりとほうびせば。はり詰たる一心の釣緒忽切て命を失ふ。其期に及んでは。莽婆扁鵲でもいつかな蘇生する事叶はず。地去により張詰たる心をたゆませぬ様に。扨こそ只今呵りしと。聞にお石も返答なく。物に馴たる大星殿とフシ諸士も感ずる計なり。地九太夫眞中に進出。詞サアいづれも。鹽冶のお家の御大事。高下によらず祿を頂戴する者は。臍を堅めて分別所。双方御存命と云ながら。折といひ。場所といひ。全く殿の御誤り。輕ふて流罪。重ふて切腹。夫を思へば胸にせまつて。智惠分別も中々出ぬ。由良之助殿には魂に餘境が有つて。子息をお呵は。驚入たる大丈夫。何かといふ中二番手の早打來らん。此一左右がお家の決着。一家中の身の安否。何れも退座無用なりと。地いへば皆々息を詰。フシ二番手遲しと待居たる。詞九太夫殿のお詞御尤。此由良之助が存ずるは。御代穩に治り。武士も町人と同じく妻子を育み。枕を高ふ臥らふと思へば。ふつてわいたる殿の災。併双方お命に別義なければ。御知行減少して。お國がへと思はる。是からは家老用人すべて一家中。大小を差ながら鋤鍬持ずば成るまい。ア、思ふ様にはならぬ世界。ケ様な事とは存ぜず。今朝より亭主役にて甚だ草臥。又早打の參る迄。不禮ながら暫く勞をはらし申さん。何れもは是にござつて御評議を頼入る。石も參つて介抱致せ。ア、是からはそろばん秤の目をせゝらずば成りますまいと。地身のかくまいを一向に。口には言へど心には。殿の御身の納りを。胸にとつくと疊込欲と見せたる大星が。所存を神も白書院。フシ夫婦打連入にける。地九太夫跡を見送りて。詞ア、侍の風上にも置れぬ家老。主君の事は毛頭思はず。其身の榮花を思ひ計るは見さげ果たる

由良之助。彼が詞を用ひず萬人の譏を受ん。今にもせよ追ての注進又來らば。善惡によつて一家中の魂定めと。地いまだ詞も終らぬ所へ。遠見の足輕かけ來り。詞二番手の早打と見へ。乘物二挺押立參り候と。地聞より皆々立上り。詞九太夫せいたる顏色にて。此由良之助は何して居らるゝ。かゝる大事にべん〳〵だら〳〵。地襠の裾小短く夫の口上。詞由良之助義。殊の外勞れまして御酒たべてをりまする。早打が參つたらば。宜う御評議。コレ御内證。家老職がそふいふて何と埒がひる物ぞ。御内證諸共に。重平參つて同道しめされ。地早ふ〳〵と追々の使に。是非なく由良之助。殿の凶事に胸の關所はふさがれど。通る物は酒計呑すへたれば一向に。心もすはり目も居れど。フシ醉ぬ顏して座敷に直り。詞何れも御苦勞。二番手の早打參る由。急度承知仕つたと。地早卷かける管よりも。細引人歩がエイエイ〳〵。體はひつたり汗雫。二挺の乘物おしらすにどつさりと。おろせば九太夫聲をかけ。詞只今の早打は。矢間十太郎と悴定九郎な。五臟六腑を揉切たり共。肺の臟全くば。物の云はれぬ事有るまじ。早ふ注進。早ふ。地〳〵と老人の氣はいら立。重太郎咽を潤し。どみたる眼に涙をそゝぎ。詞先達て力彌殿の御注進にお聞の通り。十一日勅使御到着の始より。定九郎殿と某。殿のお傍に付添奉り。十四日勅答のとき。兩人ながら配膳の御役に伺公の中。殿師直を刄傷に及び給ひ御誤極り。御預の館にて。殿は其夜御切腹と。地聞よりはつと並ゐる諸士。水に離しわだちの魚ひれ伏。吐息をつく計。九太夫五體をふるはしながら。詞シテ〳〵悴。御舍弟縫殿之助樣。お家相續なさるゝか。さればあなたは御別條なく石堂樣に御入。屋敷も即座に召上られ候と。地いはせも果ず刀追取。しらすに飛おり定九郎が。髻掴んでぐつと引寄。詞卑怯者臆病者。其節膳配膳の役成共。そくざにかけ付師直を討留。なぜ殿の御憤を晴し奉らぬ。さなくんば鎌倉にて追腹を仕り。冥途の御供致さぬぞ。生ながらへてのめ〳〵と。どの頰つさげて此早打。エ、親迄武士を捨さす悴。見るも中々穢はしと。地老の腹立氣の張弓。おつ取てりう〳〵〳〵。なぐり立られ定九郎。詞拙者も左樣存ぜしかど。今生にて只一目。親人に御對面。まだぬかす。家を出る時妻子を忘れ。刄を取て其

身を忘るゝとは。戰場へ赴く武士の心得。くさり切たる根性な悴。御城内には暫時も叶はぬ。勘當じや出てうせう。長居せば手は見せぬと。地父の怒に定九郎。顔も得上ずすご〳〵と。フシ御門外へと出て行。地始終閑居る重太郎。ずんど立て二腰拔出し。由良之助の前に置。詞只今九太夫殿のお詞をつく〴〵と思ひ廻せば。重々の不忠者。と有つて某追腹を致したり共。草葉のかげにて亡君の。御心にも叶ふまじ。所詮武士を立られねば。此兩腰をお預申す。此後一つの功を立て。御所存に叶ふ事仕らば。元の武士にお取立。地偏へ願ひ奉ると。頭をさぐれば由良之助。熟睡のとろ〳〵目。詞成程矢間それよかろ。中々武士は立られまい。いはゝ臆病腰ぬけ侍。二腰はマア似合ぬ〳〵。元の侍に成る迄由良之助御預申す今より武士でもない其方。家中へ顔も合されまい。何國へ成共勝手においきやれ。サアサア。行かれい重太郎。早く出て行け。おいきやれと。地おこり上戸の怒聲。矢間は返す詞もなく。フシほれ出るぞ不便なる。地九太夫顔を打守り。詞かゝるお家の一大事に。由良之助殿御酒が過る。成程酒たべ申した。併殿が師直を切給はぬ其中が一大事。最早ケ樣に成からは。一大事から遙行過て。どふも跡へは歸られぬと存ずるから。女共に酌さして御酒下さつたが。勿論醉は致さぬ。御評定承はらふ。慮外ながら急度承はる。されば聞るゝ通り。御舍弟縫殿之助樣は。石堂樣へ御養子なれば別條なし。併此方の屋敷は。即座に召上られしとの事。定めて當城も明渡せと有る御敎書下らん。殿御存命の間。明渡せと御遺書あらば是非なけれど。左なければ此城を枕として討死。夫では主君の御無念も少しは晴ん。此評議一決せば。討死致す者共血判して。御用金を配分致さん。由良之助殿〳〵。成程成程承はつた。コレ大事の評議に醉草臥てふら〳〵眠。コレサ只今申すは。討死致す家中の分。金配分なされふとおつしやるのか。其義は此由良之助不得心。先討死と極て金銀は何になさるゝ。刄を取ては其身を忘るゝと。定九郎殿に御異見をおつしやつたじやないか。生殘つて亡君の御吊を致す者が。金配分仕る筈。拙者追腹討死の氣かつてござらぬ。いつ迄も生殘つて。金配分致したい。地竹森喜多八進出。詞此城をのめ〳〵と明渡すは無念の至り。ヲヽ

此小寺も。此早も討手を引受。地矢種のあらん限り射て。討死を仕らん。詞何れも。御同心の家中は血判々々。ヲ、潔し。然らは血判の上にて、金配分は此九太夫が計はん。早野三左衛門サ是へ〳〵。其方金の役人なれば。御用金はいか程有るそれ聞たし。ハア委細残らず帳面に記し置。金高は廿萬兩。ヲ、九太夫が心積りも其通り。内三萬兩は。奥方かほよ御前様御一生の御貯料。又二萬兩は。御舎弟縫之助様へ御筐分。千兩は石碑料。残つて十四萬九千兩と。地帳面取寄引合せ。詞ム、金高相違なけれど。内一萬兩大星由良之助様。御用金に相渡すと。帳面に記し有るは。由良之助殿。〳〵。ヲ、成程金の事承はつた。イヤサ此帳面に記し有る一萬兩は何の御用に致された。ア、かてくへては金の吟味か。其金子は由良之助が。ア、何やら。ヲ、夫よ。普請方間垣久之進出られい。去寅の年八月八日。辰巳の大風山々の大木を吹折。御城の戌亥角の櫓。惣塀石垣一町餘り崩損じ早速御普請申付たを覺てゐられふ。其時の石材木大工日雇左官の作事。入用金千九百兩。成程。久之進が記しましたと答ゆれば。詞見ざつしやれ。由良之助虚忘致さぬ。然らば相残る金子は何と致された。まだ申せか。申開かふ。ア、夫から。米方の役人奥山孫七。地はつと答へ立出る。詞四年以前卯の年。百十ケ村青葉もなくて。百姓町人飢渇に及ぶ。大坂堺の商人米三千石買取て。御領分へ御施行米。入用金五千五百兩。地奥山帳面くり返し。フシ相違なしとぞ申ける。詞残る金は鹽濱破損。鹽田俵左衛門是へ〳〵。成程其時。外海より荒浪打て。鹽舟凡二千艘。おも柁とり柁叶はじこそ。難船の船頭に。御合力金八百兩。元の潮と消行金も。大星様の御慈悲と。地申上れば實に誠。詞辰の年の洪水に。大手通りの要害堤三百間崩れたる。入用金千八百兩。かう。地〳〵〳〵と指折て。詞是で都合一萬兩と。地由良之助が胸算用。一句一答けしとみなく。けんがの辯のとう〳〵と水を流フシする。ごとくなり。地九太夫帳面引合せ〳〵。詞ムーいかにも算用相濟だが。外に千兩不足と有るは。いかゞしめされた三左衛門。されば其千兩。某がさん用違と存じ。帳面吟味致せ共。入用方曾て見へずと。地言せも果ずイヤそりや暗い。詞殿御存命の内ならば疑も立まいが。主君なけれ

ば其方が引込と此九太夫は思はるゝ。但し又。勘當の勘平に合力でもしめされたか。此節なれば事を正し。言譯なくんば。國法に行はんと。地いふにはつと三左衞門。紛失せしは我誤りと。覺悟極めし顏色を。見て取る大星ずぶ〳〵しながら。詞アヽ物覺のない三左衞門。其金子千兩は。去年何月やら。いつく嶋詣の時。拙者がお借申した。イヤ其義は三左衞門。曾て覺が。ないとは言さぬ。帳面に付落たを思ひ出して見られよと。地我身にかぶる大星の。心はしらねど三左衞門。フシ情をかんずる計なり。地九太夫膝を立直し。詞いかに家老なれば迚。相役にも斷らず。千兩といふ金を私用に遣ふて事濟か。高祿取て何くらからむ大星殿。其金は何にしられた承はらふ。サア〳〵地聞うと詰寄々々九太夫が疊たゝいてねぢかゝれば。詞アヽ左樣になされな埃が立つ。イヤサ一家中の鏡となる貴殿と九太夫。借たでは濟されぬ。サア明白に申さふ〳〵。其金子千兩は。或は彌山の花盛。雨の徒然雪の朝。室の揚屋で。遣ひ果してのけましたと。地ちりはい付ねば九太夫も。取ても付ぬ家老の身持。日比には似ぬ大星の。傾城狂ひの放埒に。顏を見合せ軻るゝ諸士見限り フシ果れば。地九太夫もせゝら笑ひ。詞主なしに成と皆化が顯はるゝ。サア此上は城を渡すか討死か評議をしめ。祿の高下にかゝはらず。殘る十三萬九千兩。身が館にて配分と。地醉つぶれたる大星を。尻目にぐつと睨付。先に進む斧九太夫。三左衞門は大星の深き情を受ながら。一人跡へも殘られず是非なく打連立歸る。地まだ醒やらぬ由良之助。人音ひつそと靜まれば。詞ハア家中は下城しられたかと。地矢間が大小膝元に引寄れば。中門の戸の透より由良之助の胸中を。窺ふ矢間奥よりは。力彌親子が覗く共。いざ白書院大廣間。フシ見廻し〳〵。詞矢間はお家譜代の忠臣。是程の事に氣の付ぬ侍ではなけれ共。九太夫が實氣を聞。我身もせまり兩腰を。某に預出行しは。ムウ地子細あらんと矢間が刀拔放し。見れ共かはらぬ。詞彼が刀。地何でもないと投ほうり。指添ぬけば腹切刀。鋒朱に染たるは。ふしぎと目釘拔見れば。義貞と銘打たる鹽冶のお家に御先祖より。傳つたる九寸五分。詞扨は此刀にて。御切腹をなされしか。ハヽア深き心の十太郎。殿の御血をあへされし。腹切刀を某に。渡

さん爲て有たよなと。地肝にこたゆる矢間が忠義。奥と口とに窺ふ三人。由良之助は一心不亂。血に染る鋒を。盼もせず打守り。殿の鬱憤察しやり。無念の涙はら〳〵〳〵。五臟六腑を絞り出す。扨こそ後に大星が。主君の怨を報ふたる。根ざしは斯とぞ。三重八しられける

第　三

フシはゝきゞの。有とは見へて隔たりし。國にも殘る姿見の鏡の。かげのつらきより。我つま櫛に引別れ。死べき命若殿の。地愛に引れて黑髮も惜や盛の二ツ髻。身に花咲ぬかほよ御前。お傍には大星力彌。行義は常にかはらねど引籠つたる閉居の館。フシいとゞ淋しく見へにける。地お石しとやかに手をつかへ。詞代が代の時でましまさば。花見遊山は愚。一家中が打寄てお能やら御酒宴やら。おめでた揃へに引かへて。地御經讀誦の暇なくお心うかぬはお道理なれど。却てお身の爲ならず。詞お氣ばらしに酒一ツ指上んと存じ。不調法なわたしが指圖。眞平お赦し下さりませと。地いふ口上の切刻。フシ實にも家老の妻ぞかし。詞ヲヽ優しきそなたの心遣ひ。由良之助を始とし主從と成るも深き因緣。判官樣に別れし折から。俱に自害と思ひしが。地此爲若かかはいさ故一先國へと大勢の。すゝめに是非なく命をながらへ。來たかいもなふ我つまの。七々日もフシ過ざる內。詞お上屋敷はいふに及ばず。此屋敷もけふ中に相渡せよとの仰。お受申せし一家中。居なじむ館も今日限り。別れ〳〵にならんもしれず。地せめて名殘に主從の盃成共せん物と。思ふ折節そなたの親切。詞めでたいといふでもなし。誰かれといはふより。地力彌を始め女子同士。始めませふと詞數。いはでの森の露涙こぼれかゝれる御物ごし。いさと汲なす盞の。哀いやます。千代八千代。名殘數そふ春毎に。色取花もいつしかに散や果なん世のうさも。晴させ給へと取々に。酒宴フシ半も過る比。地明る襖の內外に。心を配る大星由良之助。謹んで頭をさげ。詞こはめづらしき御催し。爲若樣にも御機嫌のよい御顏ばせ。

見奉つて拙者も安堵。ヲヽ由良之助最前から待兼ました。時も時と面白そふに盃所では有まいと。そなたの思はくもいかゞなれ共。しりやる通り今日につゞまる館の見納め。上使のお入なさるゝ迄。主從名殘の盃事。必呵てたもんなや。是は又御家來の私に何のお心おかるゝ事。お上屋敷は覺悟の前。せめてあなたの此お屋敷。申受度願ひを致せどいつかな叶はぬ鎌倉の政道。渡す時刻も暮六ツ過。ヤイ。悴殿の御用達泉州堺天河屋義平。某に對面有度由次に待せ有との事。今少し隙取内。其方は勝手へ參り支度でも申付い。必麁抹に致すなと。地父が詞に大星力彌。返事と俱に立て行。詞イヤノウ。お石。最早そなたとは盃すんだ。是からは由良之助密に咄す子細も有。爲若連て奥へ行きや。ハイサア　地早ふと有るも主命の。重き仰にぜひなくも。心殘して奥の間へ。立て行間も有やなし。妙共に酌とらせ一ツ受たる盃の。こぼれやすきは女氣の。包とすれど穂に出る。御酒の機嫌も。フシかほよ御前。詞サア由良之助近ふよりや。我夫お果なされしより杖柱共思ふはそなた。見放してばしたもんなと國入の折節にも。いふて置た約束を。よもや忘れは仕やるまい。何が扨お主の御意何條忘れ候べき。ヲヽ其三ツ指を取置て。きのふの文の返事はどうじや。ハア仰に任せ認めし。我と我での文使。委い事は此内にと。地渡せば同じく袂より。そなたの送りし返事は是と。互に取あふ文と文。障子をそつと窺ふ女房外面には。立とゞまりし天河屋。フシ聞共しらず。こなたには。よれつもつれつ大星が。傍に寄添ふかほよ花。思へば憎しと女房が。障子ばつたり驚く二人。後にと別るゝ主從が。疵持足の裏傳ひ。地入間遲しと窺ふ義平。切戸の饌無二無三言破つてくれんずと。かけ込奥より暫くと。とゞむるお石が胸ぐら摑み。詞ヤア申御家老の奥樣。いかに殿がお果なされた迚。有ふ事か有まい事か。三代相恩のお主樣とせゝくりあふ根性で家老職といはれますか。此義平は町人なれ共。大恩受たお家の騷動。由良之助殿の分別も聞ふと思ひ。およぎ付樣に思ふて。遙々來たかいもなふ。淺ましき館のさま。モ一言も二言もない。判官樣のござる中こそ御用達。もふ是からは義理もない。畜生の樣な侍に金取るゝと思や腹が立つ。地奥へふん込金の催促。殘らず算用せ

にや置ぬと。腹立儘の眞實心。詞ヲヽ、尤じや〳〵。こな樣の腹立に返す詞の有べきや。定めてお前の心にも女房とぐるに成り。お主を掠める我々と。思はくも恥しいが露程もしるならば。何しに斯と言ませふ。樣子を聞たはたつた今。地とにもかくにも自が夫の所存を聞迄は。わしに預て下されと。座はかはれ共兩の手を土にすり付頼泣。ハテ詞こな樣な男じや物。問事あらば直に御尋。義平計は一人前お金のさん用せにや置ぬと。地又かけ出す後より。詞義平殿先待れよ。しづまられよと呼とゞめ。地襖をさつと斧九太夫。刀片手に一間を立出。詞最前よりの樣子具に承知致した。義平の憤り尤とは言ながら。由良之助の誤と殿の御用金とは又格別。某が聞屆けし上からは。其方が立樣の了簡は追付急度仕上て見しよ。イヤお石殿。其元は奥へござつて只何事もしらぬ體。某あしくは計らふまじ。然らば夫の惡名も。サア何もかも此胸に。ござれといはゞ先奥へ。地はつと立つ足夫の身の上。いかゞと心廻り椽。是非なくフシ〳〵も入にける。地とつくと見すまし斧九太夫。しづ〳〵と庭におり。義平が手を取り押直し。詞天河屋義平は武士も及ばぬ魂と。聞ては居れどまさかの役には立まいと。今の今迄存ぜしが。一打て萬を知る。只今貴殿の一言で心の内を見ぬいた某改めて其元へ頼入度一と通り。聞屆る御所存や。聞て安堵致したい。ハテ何が扨。殿樣の御慰さへ忘れぬ貴公のお頼なら。スリヤ聞屆る御所存とな。先忝ない。存の通り主君の御最期聞くと其儘冥途のお供と。遮て申せしかど。心揃はぬ一家中無念の數日を送る所。城内は元來此屋敷。今日中に相渡せと嚴しき御沙汰。地實夜詰たる館の内。召取るゝと思へば無念に無念を重ぬる某。忠臣二君に仕へぬ魂。詞餘人はとも有れ我一人。上使を待受切腹致す兼ての覺悟。頼と申すは爰の事。某切腹致せし跡心がかりは御親子の事。殊更女義の御身といひ。何とぞ其元引取て。地御介抱下さらば。未來の迷ひさら〳〵無し。詞お頼申すは是計り偏に頼存ると。地聞より義平はたと手を打。詞驚入た御心底。主君を大事と思召す其心を見込だ上は。お世話申さいで何と致さふ。お預なされ預りましよ。スリヤお世話なされて下されうや。天河屋義平は男。御恩有る殿の奥樣指もさゝしは致しませぬ。ハ

ア、忝し〳〵。其一言を聞く上は我も家中の氣質を計らひ。何かの事をしめし合さん。地貴殿にはまだ外に。頼度子細も有。爰は端近次の間で。暫く休息頼入ると。いふに否共町人の。敬はるゝ程悼入る。無禮は御免と九太夫に挨拶。〳〵取々別れ　地行。フシ折もこそ有れ。地千崎小寺。遙下つて手をつかへ。詞承はつて驚入た貴殿の御思案。我々迎もまづ其如く。死すべき時に死なざれば。死に勝る此身の恥辱。上使を引受潔ふ。腹仕るが亡君への忠義。九太夫殿にもよもや相違はござるまい。ヲ、某斯と一決すれば。此虚にのらぬ由良之助。いかにしても呑込ぬ。各の心底某と同心なれば。萬事申に及ばぬ事。此上は由良之助に面談致せし上の事と。地咄の中の間押ひらき。詞大星由良之助用事あらば承らんと。地臆する色なく眞中に。むづと座したる兩家老。フシいづれおとらぬ其風情。詞イヤ何大星殿。此度殿の御最後其元は無念には思さぬか。先此義がとくと承はりたい。是は又しれた事の御尋。我々始一家中御恩を受たる殿の御最期。無念と存ぜいで何と致さふ。ア、いや〳〵。御用金を配分しいづくへ成共立のかんと言れし詞反古にはなるまい。サアそれでも主君へ忠義の道が。ヲ、立共〳〵。貯有し殿の金子。外の者へ渡さふより我々が申受れば亡君先祖の弔ひ料。長くお家の爲にせん爲。ハテ御家老程有て末の末迄思召弔料は聞へたか。某始諸士のめん〳〵。上使を引受け城を枕に討死して。冥途のお供仕らんと一決したる評定も。貴殿一人かぶりふり。時日をうつす胸の内は。イヤモ其義は申さいでもしれた事。追腹致すも亡君のお爲とはいひながら。跡にまします御兩所へ。不忠と成るがお心付ぬか。去によつて惜からぬ命を惜む由良之助。ム、それ程惜い命でもかほよ御前のお爲とあらば。言にや及ぶ。主君の奥方。イヤモ主君の奥方やら。其元の奥様やら。人は知らぬと思されふが。三寸見ぬいた抽者が眼力。地何と相違はござるまいと。てつぺいひしぎにちつ共動ぜず。詞ヲ、御推量の上は包に及ばず。奥方の心を引見ん爲。あまい工も女義相應。貞女の道も忘れ給はゞ其時御異見申さんと。思ふに違ふ御貞節。申出して手持ぶさた。眞平御免蒙りしを。不忠不義との御疑ひは。九太夫殿共存ぜぬ仰。イヤ其詞くらい。〳〵。誠貞

女の心をためすに。何故艶書は送られし。ヤア艶書なぞとは毛頭拙者。覺へないとは言はさぬ證據。我手に入りし奥方の手跡。度重りしの文の面。あらはれ渡る此一通。地言譯あらば承はらんと フシ理の當然。地家中も扨はと顔見合せ口を。噤んで控へ居る。身の誤りに由良之助。物をもいはず居たりしが。九太夫に兩手をつき。詞かほよ御前の色香に迷ひ。恐るべき主君を忘れ。御身を潔せし勿體至極。隱し課せる罪科も某一人引受て。地腹仕るがいづれもへ。武士の端なる申譯。詞首は何處にさらさる共。ちつ共厭はぬ主君の罰。地介錯頼存ずると身を謙り願ひける。詞ホ、切腹願はるゝは。侍らしき性根が有て頼もしう見へまする。代々家老筋といひ命計は助けたれ共。心一致に堅まる我々。いかにしても其意得がたし。不義の惡名さつぱりと切腹召れ。拙者介錯仕らん。ヤア〳〵誰か有る。言付置し用意の三方。早々是へと九太夫が。地詞にはつと大星力彌。父が最期と白木の小四方。歩む壘の目八分。斧がフシ前に直すれば。詞コレサ力彌。親の最後と聞。心亂れて亀相は有内。氣を押しづめ此三方。ナソレ由良之助殿へ早ふ〳〵。イヤ〳〵。子として親の心知らずんば有るべからず。此三方の置所。微塵違へぬ父の寸忘。お受あれよ九太夫殿と。地半分いはせず。詞ヤアだまれ力彌。某に切腹とは何のたは言。赦しはせじと居丈高。ヤアさな言れな腹切刀を突付しは。悴力彌が計らひならず。我より先へ其元に。切腹すゝむる冥途の餞別。君御存命の内よりも。兼て師直に心を通はし。金銀を以て媚詔ひ。始終を窺ふ時も時。此度主君の御越度。落命有し元の發は高の師直。さすれば貴殿もかゝる罪科。明白たらんと思ふより。某密に諸士を招き。まづかう〳〵の物語。地我は何にもしらぬ顔。只強欲の詞を立て。奥方に戀慕と見せ。底意を探るねらひの的。詞よもやはづれは致すまいと。地言れてぎつくり驚がぬ顔。詞ハハ〳〵〳〵。我罪を隱さんと誠しやかに言ひならべても。其手ではいかぬ。〳〵。四の五の言はずと其方から。イヽヤめつたに腹は仕らぬ。せんぎの糸口御自分の御目にかけるは此三方。ムヽ此三方を詮議の種とは。地合點行かずと引のくれば。詞ヤアこりや是早野三左衞門が首。金紛失の言譯腹切て相果しな。推量の通り。殿の御用金

を盗取られ。切腹致せし早野の三左衞門が書殘せしコレ此一通。直によんで言譯有れと。地差出す一通引たくり。披けば内に卷込小柄。何故爰にと惝り仰天。ホ、詞師直が定紋の其小柄。何と覺がござらふが。ヤア何が何と。イヤサ金子紛失の砌。お金藏に落ちたりし其小柄。主は誰共しれざる盗賊。三左衞門が越度と成。切腹するより外なしと。心一つに了簡定め。我にもしらさず。相果跡。其一通に添たる小柄。よく〳〵目覺有。とくより我に見するならば。やみ〳〵と殺しはせじ。言譯も無益なりと思ひ詰たる老人が。不便の最期を見るに付。師直が所持の道具。貰ひし者は外にない。心に覺有ればこそ。一目見て驚きしは。言ねどそれと顯れ口。但し言譯の筋有るか。サアそれは。よもや一句も有るまいと。地やはらで見ぬく詞のかすがい。千崎彌五郎膝立直し。詞最早遁れぬ絶體絶命。尋常に縄かゝるか。但し踏付縄打ふか。地サア〳〵何とゝ詰寄る千崎。大星しばしと押隔。科人とは言ひながら。縄打は四夫のわざ。一二を爭ふ家老職。此方より手をかけて。未練な成敗は仕らぬ。尋常に切腹あれ。おそいと主君へ重る不忠。腹めされ九太夫と。地いへど答も並居る家中。詞言譯なくば我々が切腹をすゝめふか。お望ならば打首かき首勝手次第と。地口々におり重なつたるフシ手詰の場所。地さしもの九太夫悪びれず。諸肌押ぬぎ物をも言ず。刀逆手に取直し。弓手に突立引廻す。手先をしつかと由良之助。詞ホ、尋常の御切腹。遁かうこそ有たき物。しかし某が思ふ所存も有れば。暫しの苦痛をお赦し有れと。地刀拔取り一間に向ひ。詞奥方の仰の通り。九太夫切腹致せし間。御心慮安く思召せと。地申上ればかほよ御前。お石引連フシ立出給ひ。地自計がそなら衆の。願ひの邪魔する大悪人。詞腹切せしも由良之助の計らひ。國入の其日より。しめし合たる心の割符。そつちに探る計略の。底を見すかす主從が互の胸は敵味方。いかに悪事をなす迚も。地お主の最後を悅ぶのみか。まだ其上に我々が身の上迄も告しらす。詞コリヤ罰は主より天道のあたへ給へる腹切刀。何と思ひしつたかと。地怒にまじる御涙。お道理樣やとお石が介抱。フシせな撫さする計なり。地九太夫無念の顔ふり上げ。詞一物有る由良之助が我も底意を探る内。合點行ざる文

の通路。子細あらんと思ふ内。最前奥にて拾ひし文も。今思へば計略の。網にかゝりし運の盡。是より外に言聞す事はない。地早首打よ大星と。無念に凝フシたる眼ざし。地お次に控へし天河屋。時分はよしと立出る。切戸も開く胸ひらく。袴羽織もしづ〳〵と。白洲に額すり付け〳〵。詞何にも申さぬ由良之助様。重々誤り奉る。元來輕い身を以て。お國の御用承はつてより經上つた私。判官様の様子聞と等しく倶に無念。何とぞ此恥辱すゝぎ様はない事かと。思ふに任せぬ町人の身の上。何はともあれ御恩の殿様。跡の御用も承はらんと。お悔がてら參つた所。由良之助様のお身持さん〳〵。手一合でも御扶持を戴きましたならば。千五百石の御自分でも。いかんだ性根をため直さん物と。思へば〳〵身もよもあられず。最前の様に申したも。下主の智惠は跡の後悔。お赦し有て何かの御用。仰付られ下さらば。家の面目拙者が譽。詞力彌様。彌五郎様。小寺様。地執成願ひ奉ると。厚き詞に人々が。フシ感ずるも又涙なり。詞節なる貴殿の志誠を見ぬき大星が頼入度一通り。ヤア〳〵女房。九太夫が一味の武士隱れ聞んも計られず。奥方の御供し。詰り〳〵に心を付よ。地アイ〳〵間のフシしようじの境。エヽ詞とくにも斯としるならば。仕様もやうも有るべきに。先を取れし殘念さよと。地よろめき廻る九太夫が。たぶさ摑んでぐつと引寄。詞主君の祿をはむとは言へど。其味もしらざる不忠。表に包む惡事の裏。悴定九郎をしりぞけしも。家中に肌身を赦さず勘當。皆内通の手筋の拵へ。敵師直が犬と成て。有事ない事告しらす。人間ならぬ犬侍。相殘る者共は。御最期の折からを。地思ひ出して無念の涙。體に野邊に伏すとてもおのれやれ。詞主君の敵討んと思ふ魂にくらべがたなき人畜生。ヘエヽ獄卒とやいはん。魔王とや言はん。地見るもいまはし腹立やと。緣板ににじり付。無念フシ涙にくれければ。地大星力彌父が前に手をつかへ。詞其御無念をさんずるには。一時成共事をいそぎ。敵師直が館へ込入。討取手筈が肝要と。地聞もあへず何さ〳〵。詞すゝむは却て退き安し。用心嚴しき高の師直。輙くは有るべからず。一先屋敷を上使に渡し。思ひ〳〵に國を立退。地都山科に住居を定め。師直を討つ密事の段々。詞一味徒黨に堅まる人數。夜討のか

け引其場の用意。見込で頼むは義平殿。イヤモ其義はちつ共氣遣有るな。武具は勿論忍び裝束小手脛當。地御入用の色品はお受申して仕立つるも。御恩を着たる此體。詞ホヽ實に至極せし志。いはず語らぬ大星が。地兼ねて夜討と定めたる。其姓名は明さず共。詞徒黨の人數は四十餘人。いろはの文字の合印。くさり帷子弓鐵炮。地忍び入にはやりばしご。めい〳〵得物を提げ〳〵。一度の役と二度のかけ。先陣後陣と入亂れ。本意を達する我胸中。他門を憚る一大事も。九太夫に聞さん爲。苦痛させしも主君の罰。肝先にこたへたかと。目の内尖き武士の。忠義の程こそ。フシゆゝしけれ。地義平涙を押隱し。詞武士の鑑の由良之助樣。私風情が生根をごらんじ。御用の筋を頼とのお詞。身に取ていか計。御意にあまへた事ながら。大星樣へ願ひの品御らふじて下さりませと。地言つゝ立て小蔭より。我子の手を引氣もいそ〳〵。詞お願ひ申は此悴。一生我手に置まして何をかうと商賣の充もなく。親こそ此身で果る共。せめて此奴を侍に仕立たいと。及ばぬ望も猿猴がつきせぬ御恩は由良之助樣。お頼申さん爲計遙々連て參つた心。何卒あなたのお手廻りでお使なされ下さらば。悴が大慶拙者が安堵。アヽいや〳〵。かゝる大事を打明て頼程の某。殊に寵愛の一子。人質に取る程はござらぬ。地お心遣ひ御無用と。見透す一句にさしもの義平。悔りせしがさあらぬ顏。詞サア其誠有るお方と見込。一生不通の養子分に。お貰ひなされて下さりませ。イヤ我々は今日有て明日をもしれぬ此世の暇。申受て何の益。サア其益なき養子をなさるゝも。敵に心を赦さす工。ムヽ尤の一言。我子にせよとはよい分別。いかにも拙者貰ひましよ。スリヤ養育なされ下されうとな。ハアそれで義平が胸もさつぱり。御用を聞も悴が爲。養育頼み奉ると。地心の内は人質と思ひ定めし契約も。大事をもらさぬ誓言に。我子の命投出した男一疋幅廣の。絹フシずれとこそ知れたり。地由良之助かんじ入。詞左程にすはりし貴殿の魂。今より我々手本とし。地敵師直を付ねらはゞ。醫磐石の内に籠る共。やはか仕損じ申すべきと。詞にはつと悅ぶ義平。手負は無念のはがみをなし。詞あさき工に乘られし。せめての腹いせ汝等が。師直公を付ねらふ。しらせの早打是見よと。地肩絹取てやり水へ。流れ

尖き　フシ時こそ有れ。地一味徒黨の諸士頭。原郷右衞門大鷲文吾。堀部彌二兵衞竹森喜多八。追々に馳來る。詞御計略の通り斧九太夫。切腹見屈滿足致すと。聲々に呼はれば。ヱ、一度ならず二度の後悔。相圖を待たる一味の武士も。扨はうぬらが召捕たか。ヲ、いふにや及ぶ。其方に心を寄し人非人。殘らず一間にからめ置。汝が死出の道引させん。性根亂さず尋常に。最期を清く仕れと。地恥しめられてもひるまぬ我慢。詞我首一ツを儕等が。千萬石の加增と思ひ。介錯せよとどつかと座す。地ヲ、心得たりと由良之助。ひらりとぬく間次の間に。早御上使の御入と。しらせの聲は館の名殘。思へば無念とかけ出す諸武士。ヤレ暫くととゞむる義平。地御憤りは理ながら。役目の御上使無禮は却て願ひの妨。ヲ、實にも貴殿がいふごとく。屋敷を渡すは覺悟の前。しづまられよと制する大星。地門出の壽九太夫が。我と自滅の血祭よし。やがて本意を達する瑞相。まつ此通りと打落す。不便とさらに言ふ人の。ないて返らぬ使者まふけ。詞御上使是へお通りと。地夕ぐれてらす燭臺も。かゞやく大星親と子が。心の內こそ。三重へたくましき。

第四

歌心より。詞たらねば筆にてしらせ。文は戀路の。橋となる。フシ所も名にし。白川は。隱居妾尼道心遊民の隱れ家にて。月雪花に事かゝぬ　フシ風雅の里。地門には琴の指南所。兵法初心の稽古場と。二行に書たる釣看板表の。庭にはずつしりと。見かけに寄ぬ　フシ御影石。地石切鑿にてかつち〳〵。詞ア、これ〳〵此こつパが可愛らしい。其目へ入たら一生の。地きずい娘のあまやかし。四五人連にて沓脫の。金剛面の絹ばなをかたし〴〵にお師匠樣。詞あす又習ひにさんぜうへ。お京さんどふ遊ばすへ。わたしやきぬ〴〵最一ぺんさらへて。跡からさんぜう先へおいに。夫ならばお師匠さん明日さんぜうおさらばへと。地いへど師匠は口吃り。辭義おれそれも仕形にて廻らぬ舌をア、、、

あい〳〵と一口二口フシ皆打連て歸りける。ア、　詞此五郎太も毎日のつゝてんころにはとんと聞飽た。したがおれが石切音もやかましごんしよ。ほんにやかましい次手に。母御樣が戻らしやつて居合腰に成て。稽古場がはかずに有たら。無双流じや迚やかましろ。いや又女子の兵法つかはっ今の所がどの樣にならふと。思へば思ふ程よつ程をかしい物。又五郎太殿のをかしい事。コレ申お師匠樣又お呵なされぬ樣に。稽古場掃てさんぜうへと。つべこべフシ　お京は走り行。詞ホンニどりやのらかはくと言れぬ樣に爲業せふと。地立をどんざの袂をひかへ。早速に物いはれず用有顔を。詞お組さん何ぞ用がござんすか。ア、又物いふに歌中じやあろと。地言れてはつと赤らむ顔。戀なればこそ紅葉すつたる卷紙の。反古取出し石塔の漆墨を絞にて。さら〳〵〳〵と。フシ走り書。詞フウ〳〵又晩に忍べかへ。わたしも内方の爺御樣の。石塔をお切なさる手間に來たのがお前とわたしが緣の初め。毎日付飯で爲業すれば迚。お前迄を付飯にしたらば。宵にあこぎの　地召れたる舟は其儘有ながらで。母御に網をおろすのを。見付られたらヲ、こへ〳〵。　詞そりやそふと先度お前に借ました大まいの金。ひよつとしれたら大抵や大方の事じや有るまい。わしや是が苦になつて。案じて計居ますぞへと。　地いふにお組が　絞の。筆にいはすを讀下し。　詞フウ〳〵そんならお前が鑰預つて銀の出し入れなさんすか。夫ならば氣遣ひない。したが咄をする度にかう紙を遣ふてはたまらぬ。此反古では大佛の張ぬきせふとア、儘よ。　地鬼のこゝ間と寄そへばどこやらお組も恥かしく。抱付にさへ手もどもり。おづ〳〵抱ていとし共。言よりはるか言ぬのはかはゆらしうてフシいぢらしき。　地折から表へ破傘古土瓶。鍋ぶたほうらくかけ德利。かゞの古簑越中褌。香の物漬櫻だいのかたし〳〵行燈に取そへ三四人。ハア爰じやそふなとフシ門口から。詞ちつと物を尋ませう。内方に石屋の五郎太郎は居ませぬかと。地ずつと這入てそりや居るは。詞ヤアお家主樣か。何じやお家主樣か。わり樣は〳〵〳〵よふも〳〵斷なしにぬつくりとよふ夜拔仕やつたの。コレ爰に居るは貧せ方衆。皆打寄て家内集めて見たればの。こちの家賃米代木代味噌油。其外の買がかり物が三

百五十匁。其中へ道具屋の直打にして。錢百には足る足らず。ヲヽそふじや〳〵おれはさめがゐの拵や。石屋の手間取が不相應な研賃に身を流す。替鞘の塗賃が廿五匁今請とろ。コレ〳〵こちの道具店にぶら付して置た跡付野袴。此どんざには似合ぬ銀高一貫九百。イヤ夫計じやない。朝夕飯のかはりに命を繋だ。八文もりのうどん蕎麥が八十ばいで六百餘り。けふ中に持ていぬ。イヤマア大法じや家賃から取ねば置ぬ。それにまだ木は買はずに。竹ずのこを折ては焚。大屋根の平瓦をまくつては大和風呂。用事場の戸迄大盗人めと フシ近所へ響くわゝり醫。詞ア、これ〳〵これ〳〵わしは爰の雇れ人。是の内で其様にいふて貰ては五郎太が難儀。拜みまする〳〵と。地手を合せ共いや〳〵いやじやはい。詞其拜倒しにこり果た。代官所へ連て行。地歩め〳〵と引立る袂にお組が取付て。詞コヽこれ申。ハヽ腹の立は道理じやけれど。カヽ堪忍して〳〵と 地心はいへど舌廻らず。一人うろ〳〵 フシ氣をあせる。詞ハア美しい娘御が何やら斷いはしやるそふなが。一ツも譯が聞へぬ。アヽこれ〳〵皆様。お師匠様のとめてじやわいな。何じやお師匠様。そんならあの吃殿は貴様の師匠か。ムヽ弟子共は有内じやが。師匠共とは珍らしい。ハア聞へたいの。扨は五郎太めがあの師匠をちよびと女共にしをつたな。サア此内もかゝり合。爰の戸障子はづしてなりと。金輪際取らにやおかぬ。サア〳〵よいわいな。コレお師匠様の斷口では言れぬコレ此書付。何じや。母様の戻らしやんしたらよい様にせう程にやかましう言ふて下さんすな。シタリ。さつても能書かな。じやがよい手な事いふてだまじやないかな。そんなら母者が戻られてからめつきしやつき。サア夫迄はあの裏の兵法の稽古場へ。地サア〳〵お出と連て行。跡に五郎太が吐息つき。詞申お組様いかゐお世話。母御様へよい様に賴ますと。地爲業にかゝる石よりも。堅い後家風二ツわげ。フシ立歸る我家の内。ヲヽ 詞五郎太殿精が出ます。お組もけいこ仕廻やつたか。アヽアイ。地とは言へど男の難義。母に夫共言兼て。書て見せたは何事か。白川邊に目印の。門口に フシ案内して。詞劍術の御指南なさるゝお禮様は御在宿なさるゝか。アイ成程わたしが主の禮。地何の御用と尋れば 詞されば拙者は當所を勤し浪

人。北村傳治と申す者。劍術御指南と承はり仕官の望有るによつて。御敎へに預らん爲。二ツには又藝道御試有て。息女を下されんと有る義承はつて只今參上仕る。是は〳〵。わたしが女の身を以て劍術とは世渡の爲計。敎へまするといふ事はあられもない事。娘が事はお聞もあらん。則是に居まするがお組。親のよくめでか十人並。蟲のわざやら舌の廻らぬ難病。夫を御合點なされたら。脊尺のびた一人娘御相談はともかくも。ソレお京　地茶を上ましてたもいのと。互の挨拶おれそれのフシ間もなく又も入來る。地是も同じ浪人風お禮樣お宿にござるか。詞身共は入間丑兵衞と申す者。承はれば御息女に劍術鍛錬せし者を。聟にお取なさるゝと承はる。我等少し計覺有れば。娘御が申受たさに僧正が谷邊よりわざ〳〵參つた。ヲヽよふこそお出なされし。只今も見へたれど娘は格別。此禮が業を見ませにや聟がねにのふお組と。詞いへば娘は石切と見合す目と目に。五郎太は默き揉手をして。詞イヤ申。私風情の下主下郎が。申は慮外がましけれ共。只今お出の聟樣は御兩人。何流かは存ぜねど。しなへなり共木太刀なり共。一ト勝負なされた上御緣組がよござりましよ。ヲヽ成程母もそふ思ふて居ます。早速ながら御兩所のお手際拜見致したいと地いふに丑兵衞それよかろ。詞サア〳〵どなたか存ぜねどお相手に成申さふかと。地すつくと立ば北村傳治身不肖ながらお相手に。成申フシさふと身繕ふ。地五郎太は心得木太刀眞中に直し置。詞憚ながら御兩所樣公業の御勝負。何にもわたしは存ぜぬながら。兵法の極意と申すは。一且の勝は勝ならず。始終の勝を肝要と承はれば。未練な勝負を遊ばすなと　地いふに丑兵衞目に角立。詞イヤヽヤ己らが分際で何推參な。すつこんでけつかれ。イヤ左樣におつしやりますな。私も去人の咄に聞ましたが。渭濱に釣せし其中に。太公望といふ者が有たと聞ば。どこのごもくの其中に手者も有るまい共申されませぬと。地聞て傳治が面白い。詞そふいやわれも手が利な。相手にならふ。おれならふと。地すかさず傳治が蹴かへせば。向ふへしやんと畏まり。詞何をなされます。お二人勝負なされませと。地いふをも聞ず丑兵衞が。首筋摑んでぐつと引立又。ふり落せば後へしやんと。いらざるてんがうなされますな。地イヤ

推參と兩人が又立向ふを母は見るより。詞ヲヽ手並は見へた。聟はしれた。ヲヽしれたとは此丑兵衞か。イヤ此傳治でござらふが。イヽヤ聟に取るは此五郎太。ヲヽ劍術器量。娘が夫にする人はこなたならではないわいの。尤丑兵衞殿の流義は竹の內。傳治殿は宅間流何れにおろかはなけれ共。わけて五郎太の流義。今は絕てしる人なき。たくみや流奧義を覺し其五郎太。此お禮の聟がねと聞て二人のすまた聟。つツぱたかつたは下手の鞠。井戸へフシ落した心地なり。詞丑兵衞殿。傳治殿。お互に遺恨はござらぬ。馬鹿らしい花聟。迚もの事にたくみや流の奧の手見よふと。兩方より胸ぐら取て引立れば。後へつま立とんぼう返り。投付られて二人の侍なま兵法頰がまち腰をかゝへてフシしかみ頰。詞ナント手並御らうじたか。まだ心元なくば是からは此母が。眞劍を振舞ませうか。イヤもふ重々御雜作で。地痛入たと門口から逸足出して逃歸る。五郎太が手並に借錢乞。家主先にふるひ聲。家賃も命の有てこそ。こそ〳〵フシぬけて往ぬ所を。詞コレ〳〵待つしやれ。ハヽイ待ましてござります。こなた衆はこちの聟へ金催促に來たのじやの。イヱ何のお前左樣な者じやござりませぬ。イヤ〳〵そふ聞た。けふから聟に定める上は不埒な事は捨置れぬ。不肖ながらマア是で。地了簡めされと三兩一歩。品よふ捌く柳生流。詞エヽ是を私共に。ヘヽヽヽホヽヽヽヽ是は。マア〳〵〳〵お冥加もない。お忝ないおめでたい。お嬉しい御祝言。サア〳〵善は急げじやいでお取持仕らんと。何がな追從かけ乞變じて媒役。てんでに運ぶ酒肴。詞私は家主でずんど前から聟樣の。氣はいを存じてをりますが。夫は〳〵正直な。ほんにもじきなか人に損をかけぬ人。ヲヽ〳〵〳〵それよ忘れた聟樣の。荷物が是にやれあんど。家重代の古道具。捨賣にしても百二三十の御身上。祝ふて一ツ打ませう。しやん〳〵。三兩一歩で借錢取すましたしや〳〵んのしやん地しやん。と妹背のかための盃親子は。奧へ掛乞共。我家へ〳〵こそは立歸る。地寺々の六ツ打交て思案巷に恩と義理。重戸棚のとつ置つ。地奧口見廻し一人言。詞いか樣緣はあぢな物。鹽谷殿の家中早野勘平といふ武士が。殿の御不興蒙つて本國へは音信不通。歸參を祈るかひもなく。主人の最期と聞無念さ。親三左衞門

殿も。御用金も失ひし科によつて切腹と。聞て頼も綱も切れ。地せめては其金子を償ひ。夫を功に由良殿の連判に加はり。草葉のかげの御勘當。御詫を願ふ便にと。詞思ひ付た金の才覺。無心の綱につい夫婦になり。思ひも寄ぬ親子の約束。地今宵の内に此家を出。敵討の供すれば。再び生て返らぬ身の上。うすき契としらぬ娘。不便とは思へ共。詞此家にあんかんとして居ては。主人への功立ず。地ハテどうせう何とせん方内證の。御勝手はまだ白紙に。フシかけ硯の置所。地漸さがして行燈のかげ。書く墨色は人がらに似合せぬ能書のちらし書。ちらと見付たフシお組が廻り氣。地脇からちよつと狀の端。はつと引取りさあらぬ顔。詞エヽよふ書手を持て居る人に。此悪筆を見せるのは。恥かしいお組樣。イヤ樣じやない女房共。わがみやアノ眞實おれがかはいひか。但し憎いか　地聞たいと。あぢな所へ紛らせば。地戀中ながら今更に改つたる初女夫。恥しそふに。詞かはいひ。うそじやあろ。ほんじや。サほんにかはゆくばの。一生の無心が有る聞てたも。といふは外の事じやない。けふ夫婦に成た今夜。そちからおれに暇を給も。サ、悔りの筈。男の方から女房に去れたいではなけれ共。何を隱そふ。せんど其方に無心いふて借受た百兩の金は。おれが主人と祟る人に差上た目見へ金。其金の德で元の武士に立返り。明日は東國へ下らねばならぬ時宜。此家に居るも今宵限り。暇乞の其書置。母人へ渡してたも。女房　地さらばと立上る。思ひがけなき詞にははつと。詞マ、マ待て〳〵。ソ、そりやナ、なぜに。地なぜにと驚く計口へは出ず。もだつく胸のもつれ緣糸に。いはする恨事。いとし。かはゆき方樣に。見放されんも白つゆの。葉末に結ぶ。うき身ぞや。詞ホンニお前故なら。子の日の若菜君が爲。惜からざりし命の中。我せたいをもせわやかば。詞嬉しさは山々。二ツには又母樣へ。及ばずながら朝顏の。夢計なるフシ御孝行。詞それさへ捨て行ふとは。ソ、リヤ聞へぬわいな〳〵。成程々其恨は尤。イヤもふおれも。此内の家督を繼がいやではなけれど。今いふ通りの手詰に成た。恩しらずとお禮樣の思召も氣の毒ながら。爰をよふ合點仕や。侍にたるからは今日有てあすない命。死だと思ふて。東國へおやりなされて下されとお取成申しても給もそ

なたも外によい聟取て。もふおれが事はふつゝりと思ひ切りや。是が一生の暇乞に成ふもしれぬ。母人へよい樣に。頼む　地〳〵と言捨て又立出る夫の袂。お組は取付なふ情なや。外の男と添心なら。何のかうした堅めをしましよ。詞わしじや迚。マまんざら事を。分てのお詞を。悪ふ聞てはなけれ共。いかに男の。癖じや迚。あんまりむごいと夕顔の。花咲せとはどうよくと。泣て　フシくどくこそわりなけれ。地隠居の間より母お禮。襠姿に大小携へ。勘平が傍に置。詞こな樣も浪人の果。近比侮りがましけれど。親子の印聟引出。地かう縁を組て置て。改めて頼まにやならぬフシ　樣子有り。詞よもや違背は有るまいの。何が扨母のお詞。殊更大恩の義理有る御方。御頼とは勿體ない。此方よりもお願ひ申子細有。先あなたのお頼から。イヤ〳〵かる〴〵しうは申されぬ。詞を背ぬ誓言が聞たい。ム、〳〵と　地勘平ずんど立。澁紙包の古大小を提出。詞柄糸は切たれ共。武士の魂變ぜぬ證據。地斯の通りと丁々金打。詞ヲ、心底見へました。其頼の子細といふは。敵が討て貰ひたい。サア助太刀がしてほしい。ム、敵とは主の怨か。但しは親の敵か。娘が爲には親の敵。母が爲には夫の敵。シテ其敵は何國の誰と。ヲ、知て有る共。敵といふは伯州鹽冶判官の家來。大星由良之助じやはいのと。聞て恟りム、。由良之助を敵とねらふ人々の御由緒はな。サレバ其由良之助と膝をならべし。弄九太夫が後家でござるはいの。殿御生害有し後。一筋に忠臣の夫。城を枕に討死せんといひ募つたを根に持て。卑怯未練な由良之助が。詰腹を切せしと。家來が屋敷へ歸つての注進。其時の口惜さ直にかうとは思へ共。悴定九郎は行方知れず。なま中女の双向ひ立。犬死をせんよりとすご〳〵國を立退日より。地あはれ力と成る人がなと。朝夕祈るかひ有つて。見所有るこなたの人がら。此人こそと徒を娘に敎へてしかける戀。詞用立た百兩の金は。夫九太夫殿筐の金。則けふが五十日の時に當る成就したあの石塔。連合の石碑の前で。聟舅の契約すれば。地こなたの爲にも舅の敵。大星討て未來の妄執。晴してしんぜて下されと。金の出所娘の由緒。ぐはらりと知れて胸ぎつちり。頼の先を打かけられ　フシ只うつとりと。剞るゝ計。コレ　詞聟殿。返答ないはおくれが付たか。

聟と成り子と成って。今更ちっ共引しはせぬ。得心なければ三人共。差違へて死る覺悟サア。サア〳〵。何と〳〵。アヽこれおせきなされな。ハテ餘り御念が入過る。侍が金打して。變改する法が有ふか。アヽいかにも誤りました。娘悦べ早敵を討た心が　地するはいのといそ　フシ〳〵いさむ折も折。　地表に足音とん〳〵と戸を打たゝき。御案内頼ませう。何方よりと明る戸の。おとなと思しく白臺の包を先に兩手をつき。　詞早野勘平様へ主人由良之助申まする。兼て亡君の御石碑。京都の御菩提所に建度念願。幸貴公様只今の御家業と承り。勘平様より御調進下されなば。且は忠義の一ツ共成申さんか。些少なれ共石碑料進上仕る。委細の義は由良之助〻追付それへ參上と。　地聞も終らずせき立つ母。　詞コレ〳〵。由良殿の見ゆるは後程御馳走はまだ早い。女の出向ひ無禮の沙汰。イヤナニお使の旨承知致す。御返答はお出の砌。後刻。　地〳〵と挨拶に。　フシ使は別れ歸りける。お禮は四方伏拜。　時時こそ有れけふ敵が爰へ來るとは。佛神三寶力を添させ給はる印。たつた今初めて知た。本名早野勘平殿。氏といひ武邊といひ。慥な助太刀有るからは。　地本望とぐるは今此時。　フシ娘用意といさみ立。　詞アヽコレ〳〵せく所でない大事の場所。　拙者が聲をかくる迄必々早まるまい。　地敵討は恥有る物。遺名有る由良之助に。卑怯の振廻致されな。我も用意と打連て　フシ隱居の間へと入にける。　地大星由良之助義兼本意にあらぬ天を戴き。月日に恥る義の一字いかで此儘山科より　フシ蔦の細道門の口。　地かくと案内に勘平は。兼て嗜む麻上下。腰に重代相州物さしも。立派に出向ひ。　詞御苦勞の御入來。先々是へ御通り下さるべし。コレハ〳〵早野氏。然らば　地夫へと上り口。玄關なけれど式臺は武士のフシ　禮義の書院向。　地勘平下座に手をつかへ。　詞拙者十一歳の年。わらべ喧嘩に過つて傍輩の子供を手にかけし科。御慈悲を以て殿の御勘氣。市町に生長共。昔を忘れぬ此二腰。石碑の役目仰付られ下さるは。身に叶ひし事ながら。此上迚もお情には。貴君思し召立れし。大望の連判に御加へ下され。東國の御供に。召連られ下されなばアヽこれこれ。由良之助に覺なき大望などとは。麁忽ばし申されな。夫はとも有れ。幼少よりお別れ申した勘平殿。とくと面體

拜見致さふ。是へ〳〵。いか樣稚顔覺有。三左殿に扨きつい似よふ。何かは知らず。由良之助が東國の供したいと有るが。其元にはどの命を以て供はめさるゝ。ヱヽ。イヤサ眼中どみて息づかひ。晉聲五音の調子をはづれし。死人を供には連られまい。但し命にかけがへ有てか。ハア、御尤千萬。いかにも拙者が命のかけがへ。地是御らんぜと取出す。位牌にしるす逆朱の文字。俗名早野勘平廿六歳討死の先がけ仕ると。兩肌ぐはらりと血汐の紅。頼切たる勘平が。自害を立開親子が惻りゝ。うかつに切ても出られぬ時宜樣子。フシいかにと嬲ひゐる。地由良之助立寄て。詞しなしたり勘平。義臣の中に加はりたさに。御邊より調進せし金子。鹽冶の家の極印あるは。是正しく斧九太夫が掠取し千兩の内の金子。不義の手より出たる金御用には立られず。夫といはじ勘平が志を無にする道理と。石碑料と名を付て返進せしは。個樣の最期をさせまい爲。去ながら討死を常として。我身の位牌を刻置程の魂。生よといふ共よも生まじ。地ヱヽあつたら侍をせめて鑓一本の主になさゞる殘念や。見事〻〻と一言が。フシ百萬石より身にこたへ。詞親三左衞門切腹も。用金を九太夫に。盗れたる故なれば。我爲には親の敵。地其敵の娘共しらず。非道不忠の九太夫が。一家と成た業さらし。位牌に血汐の此逆朱。勘平といふ名計は。敵討の御供を御赦免願ひ奉ると。いへど主人の御勘氣は。心一ツに赦されず只默然たる後の方。指添拔手も見せばこそ。我と貫くお組が覺悟。母も遺はフシ武士の妻。地さはがず由良が傍近く。詞常の氣質は知ながら。死だ夫に鼠負が付。道有る由良之助樣を。九太夫殿の敵と。今の今迄思ふたは女の淺はか。ひよんな聟にならしやつた。勘平殿がいとしぼい。地娘が死れば不忠者の緣は是迄。何卒血判の其中へ。お記なされ下されかし。娘も俱にお願と。抱起せば手を合せ思ひ入たる親子の歎。不便さ。フシ隱して聲あらゝげ。詞斧九太夫が女房娘。緣有る者の願ひでは。彌以て叶はぬ〳〵。地ハア實に夫よと氣の付母。傍に有あふ琴引寄。刀追取十三の。糸筋さつと切放し。詞娘も聟も勘當じや。敵の緣にからまれし血筋糸筋。まつ此樣に切捨たれば。今よりはあかの他人の二人の者。地他人よさらばと一言に。誠を立ることはりを割ていはれ

ぬ。フシ母の慈悲。詞ヲ、他人とはでかされたり。しかし二人が末期の際。しばしの名殘は苦しかるまじ。イヤ〳〵〳〵。娘でもない。聟でもない。先立夫九太夫殿に。仇敵の勘平夫婦。罰が當つてきみよい最期。ハ、〳〵〳〵地と顔背け笑ふも泣も眞實の。一ツに落る蓮の露。地刀を杖によろめく手負。思へば九太夫父の仇。思ひしれやと石の面。念力こつて拜打。石の片かは切割たる刄は正宗忠義の手の中。地大星思はず聲を上げ。詞忠臣早野勘平。敵討の一番鑓血判濟だと有ければハア地はつと一度に悦びの。心ゆるめばがつくりと。同じ冥途の友千鳥。無常の風にフシ引取る息。あはれ。はかなきや。三貫さだめなき

第五　道行人目の重縫

戀の種。たがいつの世にまきそめて。情のみばへ咲しより。いとしかはいの花ざかり。男さかりフシ色盛。フシ遊びかうじて。粹となり。かどの取れたる石堂につながる。ゑんや縫殿之助。戀のはじめを浮橋に。つひ仇惚も誠となりて。ほんの女夫に成たいと。思ふ思ひも儘ならず。任せぬ事のつもりでは。何のまゝよもうは氣同士。只思はずも死神にさそはれ〻行ぞ。はかなけれ。人目つゝみを二人づれ。ともに手に手をとりべ野の。露ときへんと浮橋が。死出の下着は白無垢や。上に雞頭の伊達模樣。中着緋紗綾に黑じゆすの帶。年は十七初花の。雨にしほるゝ立姿。男も對のはで小袖にて。裳ほら〳〵ア、定めなき。廿一期の色ざかりをば。戀と情に身を捨草の。野邊は榮たねのフシ花ざかり。蝶よ小蝶よ榮の葉にとまれせめて暫は手にとまれ。手なべさげても夫婦となりて。つがひはなれぬ。女蝶と男蝶。二世のかためのさゝごとは。それ覺へてかもんじにて。後の月見に逢初見初。いとしらしい殿御じやと。思ひ初たが緣のはし。わしゃ其時それそなたの。かはいといふほどふした物と問やつた時にこれかうと。抱付たれば。嬉しげに互にしめつしめられて。變るまいぞと誓紙のかため。それがこうじてフシ此樣に。死出の田長や經よむ鳥と。

地おくれ先立鳥さへも冥途の道の友となる跡にのこりし親鳥の。ちゝ呑つばめいたいけに見送る。軒と見フシ返る野邊と。中に飛こふ螢火かいや。あれこそは夜ばひ星行て。歸らば身の上を。言づフシてもがなつてもがな。夜も早ふけてしん〳〵と。アレフシ清水の鐘の數。九ツこゝに北南。八坂の塔はたうとくも。死に行のは大膽な。命しらずの惡性な者と人さんが。笑はんしても大事ないがそりや。かはいのじやない憎いのじや。しんぞの時から逢なれて北野清水祇園樣戀の願ひに願かけて。歩みをはこびし甲斐もなく。今死ぬる身のはかなさよと。こぼす涙は道のべの。草フシ葉を。ひたす計なり。地男も涙にくれながら夫婦は二世と聞なれば。あの世でそはんこなたへと。最期を急ぐ死出の旅雲かあらぬか無常の煙明日はふたりもいづくの雲。いづくの煙と立のぼり。冥途は六ツのちまたにて迷ふまいぞや迷はじと。いそぐ。心の細道を。行ては歸り歸りては。榮たねの花にむら〳〵〳〵。むら〳〵ぱつと蝶々の。露に樂しむ我々は早。しのゝめの山かずら明方つぐる聲々の鳥部。山にぞつきにけり。詞よう〳〵旦那出來ました。おふたり共に今の身ぶり。たまつた物じやござりませぬ。素湯のかはりに御酒一ツ。ソレ中居共お銚子持て。先お盃を早ふ〳〵。申し旦那おふたりの道行にすつて付たわたしが後見。何とお氣に入ましたか。ヲヽあの取廻しでは本舞臺へやつてもまんざら呵られもしよまい出かした〳〵。夫はそふと是程の大出來に此治郎右衞門は何して居る。ほんにそれよ。道行に取紛れとんと忘れて居りました。うがのみたまの治郎右衞門〳〵。はつと答へて立出る歌身には帷子の思ひ付げん氣に見せる顏付も。フシさながら寒いと知られたり。地聲子春野が二上り調子。ヲヽ、詞治郎右衞門のきついげん氣。寒そふな顏付はすつきり夏の氣丈立。一汗入たがよいはいなと。地あふぐ春野が扇の手。じつとおさへて。詞イヤ旦那へ申上ます。扨只今の道行。トおやりなされた所。嵐三五郎は扨置。中々いらひ人少しもなし。ずつと上でござります。扨浮橋樣きつい隱し藝。ガお前をつき出しの。新造樣とは思はれませぬと。地譽られる程恥かしく顏は上氣のフシ室の梅。詞ヲツト胸中取てをります山わん久ツとお上申ましよ。テモ惡い口合。おさへもせうか。

そこらでお間と亭主がずつと。呑でよんだる花嫁御。嫁御お北はとぼ〳〵と。是はあんまり生さきや。亭主がきつとおさへましよ。えましよの時の鉢の木は。鉢の木の金比羅大權現。大權現の赤人田子の浦。田子の浦大蔵の音聞ば。音聞ば元が凡夫なり。凡夫なりしたる子安貝。ヤアとせいよい〳〵。ヨンドよし有げなる大名の。花をかざりし脹へは。是ぞ都の遊びかや。詞サア〳〵やんがて根引の浮橋様。手附も濟でおめでたい。悦ぶ門へ福來ると。どふぞ且那を取持てくれと頼んで居る人がござります。ソリヤ誰がへ。少しはお腹も立ませふが。何事も治郎右衞門任せ。跡で宜しう計ひます。何はとも有れ。ちよと御面像お目にかけたい。コリヤ面白い早ふ〳〵。我一走呼でこい。我等參るに及びませぬ。追付是へもふ爰へと。地いふ間せはしき大盡客。詞初めての座敷といひ。恥しがるまい物でもない。治郎右衞門を始。亭主中居向ふてこいといら立の。地聲より先へ治郎右衞門。畏つたと三人が。フシ皆打連て行跡は。地悠氣に心浮橋が。浮ぬ目元を。見て取て。詞ハテ扨粋の様にもない。わしとそなたの譯しつて連て來る治郎右衞門。思案がなふて何とせう。マア〳〵地見やといふ内に。詞春野さん〳〵。今爰へ見へたれど。恥しがつて埒が明ぬ。ちよつと何なと引ておくれ。あい〳〵。歌うかれ廓の。夕げしき。歌春や。むかしに。かはらねど。變りやすきは男の心。つもり〳〵し數々の。うき川竹の　フシ八文字。詞ヨウ〳〵見事々々。風俗なら器量ならどつこに一ツ言分ない。向後さつぱり浮橋が事思ひ切。今からおれが奥様じや。何と嬉しいか〳〵。そんなら治郎様にいふたこと聞屈ての今のお詞。ほんにせいもん添い。といふ様な事が有たら。浮橋様はどふ有ふ。それこそわしが取持て。殿様と女夫にする。コリヤ添い。頼まれた顔も立つ。悦びにつひちよつと。春野主頼と人形によそへ。歌わしとおまへが其中は。出雲の神さんと約束すれば。つい新枕。里に戀すれば浮世じやへ。詞トやつた物じや。是もやつぱりお二人の。中を祝せし我等が頓作。出かしたと思召ば。浮橋様の身請より。此太夫の身請から。皆迄いふな呑込だ。それと地指圖に挾箱。いはぬ色なる山吹の。花も實も有る武士の。詞ずつしり百兩。詞スリヤ此金子を私に。ヲヽ太夫が身の代。何か

とそちが心遣ひ。右と左に二人の君達。奥でわつさり酒にせう。コリヤよふござりませう。醉ざめかして私もどふやら寒なつた。お前樣の其羽織。カ。ジヤ。脱でやれ。貰てやれ。次手にちよつと腰の物。是も暫しはかしのへ。とうざい此義は首尾よふ仕課せましてござります。てんから〳〵打ぬ間に人形が百兩。からくり師は竹田近江や治郎右衞門。又臺を餝かへてお目にかけまする。歌思ひにはどうした花の咲事ぞ。身にぞしらるゝ憂やつらや。詞何と旦那御らうじましたか。大座敷には馬鹿者の縫殿之助一人。由良之助親子は未だ參らぬ體に見へまする。鹽冶が弟縫殿之助に心を寄る大星親子。何にもせよ某が爲には親の敵。今宵の中に親子諸共打はなして。ヤア聲が高い。道々も申すごとく。此度京都へ罷登し其樣子は。師直殿を付ねらふも計がたし。其目附に登りし某なれ共。鹽冶が家中の頻を見しらず。夫故に定九郎殿を身が家來に仕立。事の樣子を窺ふ所に。一向に粕果たる馬鹿者共。此上は用心もへちまも入らず。只心憎きは彼浮橋。縫殿之助にうつ惚。身が座敷へも寄付ず剩へ身請の相談。きやつに受出さしては。藥師寺が武士立ずと思ひ詰たる今日只今。浮橋めを此方へ身受して。縫殿之助めに鼻明す某が分別。都にて大馬鹿を盡す事。一々に鎌倉へ告しらせば。物がたい石堂勘當するは定の物。さすれば某望の通り。浮橋も我手に入。彼是以てよい手番。うまい地うまいと兩人が。咄の中へ亭主が高聲。詞是は〳〵藥師寺樣。去とは遲い御來臨。今宵は縫大盡樣の御趣向で。歌舞妓やら操やらたまつた物じやござりませぬ。夫故に奥座敷はあの通り。地先二階へと フシ亭主が案内。詞コリヤ〳〵定平。其方は勝手に殘り。歌舞妓狂言とやら餘り見た事も有るまい。ナ。ソレ。とつくりとナ見物せろ。亭主後程彼めに見せてやつてくりやれ。アヽよい時分にお知らし申ましよ。サア藥師寺樣には先お入と。地しらぬ亭主が挨拶も。已が心の勝手口。フシ別れてこそは入にけれ。地人目にそれと紛ひなき。夜目に輝く大星力彌。尺八腰に指添も立派に見ゆる フシ其跡から。地錢銀なしに買たがる喧嘩を充に フシ二人連中に 地はさんで。詞コレ前髪。毎晩々々此里へ精も氣根に通ひ詰。爰らに若い者のない樣に。マア此尺八が借たいわい。ヲヽ其草履下駄を

貰ふかいナ。ヲヽ、望ならかしてもやらふ。どふして借て見やんすぞ。ヲヽ、かうすると後から。地肩衿取てしめ上る。詞ハテじやら〳〵とこなお人。男に抱付何するのじや。慮外者めと投付る。すかさず眞額眼潰し。ひらいて捻る小手がへし。又起上るを踏すへ蹴すへるさそくの力彌。地さつても手ひどいばりめじやと。口は達者に足腰を。撫つさすりつ逃歸る。地始終見すまし治郎右衛門。詞ヲット見て居た力彌様。其身ぶりを見たからは。今夜の狂言氣づかひなし。曾我の五郎の役相應。角鬘は直に有り。旦那も待兼我々も迷惑。サア地お出と無理に引ぱる治郎右衛門。堅い生れも親の孫。奥へ入さの月ならで。フシ花と見紛ふ浮橋が。跡に附添ふ亭主才兵衛。詞只今申通り。二階のお客がお前にきつい執心。此間からお通ひ有れど。ちよつ共お貸なされぬは餘りきつゐなされ様。是非に今宵は暫しても。アアコレ才兵衛様。赦しておくれ。知ての通り身請の相談。殊に揚詰の内外の客へ貸にいては。縫様へどふも立ぬ。いふてもおくれな。さよ嵐とはおどうよく。お隙は取ぬマアちよつと。ヲヽくど。亭主々々。ハイ〳〵。夫へ參りますと。地言ひつゝあがる障子の内。心ならざる浮橋に。わざと聞する藥師寺。詞ムヽ日がらの内はかす事ならぬとな。コリヤ尤。そんなら直に身請の相談。夫も先達て此方へ手附金二百兩。夫共身受がお望ならば。何にもいふな。こつちは直に身受金。いか程成共只今渡す。夫でも身受は出來まいか。何が扨〳〵。金子さへお渡しあらば。浮橋様はお前の奥様。然らば萬事そちが働。金と證文引がへに親方を呼にやれ。ハアお氣づかひなされますな。追付吉左右お聞せ申さん。必ぬかるな。藥師寺様。亭主。急度返事を待てゐる。歌きぬ〳〵に。明のむつ言今さらに。詞様子聞程此身のなんぎ。打わつて殿様にもいふに言れぬ跡金の四百兩。今宵の内に調はねば。是非共身請は藥師寺へ。行ねばならぬわしが身の上。どふ思ひ廻しても。殿様に添事は。未來より外なしと。地極むる覺悟女氣の有あふ脇指拔かくる。マア〳〵待たと治郎右衛門。詞イヤ〳〵はなして殺して下さんせ。ヲヽお道理〳〵。かはいと思ふ男故。死ると思ひ詰たお前の心。したが。何ぼ好た男でも。何の事もなう受出されて。添てはけつく面白見も何にもない。逢たふても

逢れぬ。術ない所で色も戀も樂しみも有といふ物。じやけれ共。其間を辛抱せずに。ゑてはお前の樣な不了簡を出すか。又は心中して死で。先で樂しもふといふが無分別の天上と。いふ譯いふて聞そか。今死て逢ふといふ極樂へ。道が何ぼ有ると思はしやる。經にさへ十萬億土と有。一里を十萬億積だ道じや。一日に十里づつ歩行にしても。日數に積つて見るに。日本の始り神武天皇の時分から歩いて今に行着か着ぬかじや。扨此道中の入用が。宿錢から晝食からかけて。凡百十萬八千貫目程入る。草鞋代計が。錢で十五萬五千五十貫。通し駕にすると。千百十六萬九千五百八十貫目。是だけ銀がなければ極樂へは行れぬ。此十分一有れば。此世で結構な世帶が出來る。必そんな思ひ付は。マ、マ、よしにさんせ。又人にも相談といふ事も有。死ふとさへ思ひ詰たら。どの樣にしても縫殿之助樣に添れる。今の樣な事は。ふつゝり言ぬがよいぞへとくどうは言ぬ　フシ粹の異見。　詞お志は嬉しいけれど。知ての通り二階の客が身受の談合。サア〳〵何にも言ふまい。まだ揚詰のお前の體。夫をあつちへやつては此所の大きな名をれ。氣遣ひさんすな。泣事はない。治郎右衞門は男じや。二百兩の手附の上。わしが最前貰ふた百兩。是を渡して廿日の日のべして見せる。コレおれじやはいの。酒でも呑で。氣を慥に。かういふ中も心せく。且那の傍へ。サア早ふ。　地往て來ませうと逸參に。　フシ飛がごとくにかけり行。　地跡見送つて浮橋が涙の顏をふり上て。人の心は樣々の中にも厚志。死でも忘れぬ〳〵と。　フシ只伏拜む嬉し泣。　地奥は仕組の夜討曾我。衣裝素袍も其儘に。立出る縫殿之助。泣顏見せじとそらさぬ顏。　フシ力彌もつゞいて立出れば。　地げいこ中居が口々に。　詞力彌樣が五郎の役はすつて付たよい見物。サアサア素袍かけゑぼしと。　地めい〳〵すゝむる眞最中。鎌倉よりの早使渡邊作太夫。息次あへずつと入。　詞石堂右馬之丞樣の御子息。縫殿之助樣へ御對面申度由。たそお取次と相述れば。　地中居が惚り。　詞ヲ、笑止。ひがらしい侍か。縫樣は爰にござるを知もせず。御用あらば直々にと。　地聞よりはつと手をつかへ。　詞コレ若殿。縫殿之助樣。此お姿は何事でござります。親殿右馬之丞樣より急のお使。此文箱と　地指出せば。手に取上。披もやらずにこ〳〵笑ひ。　詞扨

其方は仕合者。結構な所へお使にお出なされて。我々が狂言お目にかける。爰に居るは大星力彌。器量はよいが初心者。ヱ、由良之助が病氣でなくば見せたいな。イヤ〳〵若殿。見ますれば御酒機嫌そふな。先お心をおしづめ有て。其御狀とくと御披見あられませう。見なといふても親仁も同然。さらば對面致そふと。地封じめ切て押披き。詞一勘當の事。讀に及ばぬ仕舞々々。サア〳〵こんな事て有ふと思ふた。イヤ其元も遙々の所。老足のきつい御苦勞。あつがんにして一ツ呑め。銚子持て〳〵。ア、。いや〳〵暫く。まだ申上度子細有。お女中方は先奥へ。ハテござれと言はゞ先奥へと。地しかり付られ浮橋も。心殘して奥の間へ。フシ皆ばら〳〵と立て行。詞其元が由良之助殿の御子息力彌殿。此度若殿の御身持。内通を以て悪様に申越し。聞捨ならぬ大殿の御立腹。夫故にこそ此大事。何卒お心改められ。御勘氣御赦免有るやうの取計らひは力彌殿。若殿様を主君と思ひ。再び家を繼木の梅。我は老木の花も。實も。地香を尋てや人も來ん。早おさらばと一言の。言葉を殘す胸の中フシ思ひ。殘して歸りける。詞サア〳〵是てさつぱりした。悦び酒に奥て呑ふ。地力彌もこいと立上る。袖をひかへて。詞縫殿之助様。御念願の通り御勘當受られ。定て御本望でござりませう。ホ、適力彌。道由良之助が悴。我此年月兄の讐憤。討んと思ふ心より。親人の勘當受たる此體養父の恩は須彌大海。深き計略大星が一味徒黨にかたまる武士。其姓名はしらね共。我も人數に加はりなば。少しは義兼が力となり。無念を散ずる我所存。力彌いかにと有ければ。さん候其計略と存ぜし故。我を付置忍びの守護。今ぞ本望去ながら。徒黨の人數の其内に。あつたらしき侍は早野勘平。連判には加へしかど。ぜひに及ばず無慙の順死。此姓名を其儘に早野勘平光興と。今より御名を改められ。地一味連判疑ひなしと。水を流せる辯舌は。フシ實に大星が子なりける。地小かげに立聞定九郎。見合す力彌が顔と顔。奥へとしらする此方の目づかひ。呑込む若殿縫殿之助。詞いひ合したる夜討曾我。地五郎來れと互の狂言心は。フシ跡に奥へ行。詞力彌殿久しいの。見忘れもさつしやるまい。定九郎でござる。ハテ貴殿には御器用千萬。草ずり引の夜討のと。徒黨の人數をかり集め。面白い狂

言事。此定九郎も其人數に入て。似合の名も改め。親の敵の討やうは。まつ此樣と切付るを。地飛しざつてしつかと受とめ。詞お尋なうても此方から。御傳授せふと存ぜし所と。地打合切合切むすぶ。互に手練の其中へ。戻りかゝりし治郎右衞門。惚り仰天力彌樣。こは何事と フシおどぶるふ。詞ヤア治郎右衞門。邊に氣を付物音まぎらせ合點か。地はつとは言へど蹤わな〳〵。心得たりと有あふ太皷。打どひやいの拍子ぬけ。詞切あふ鍔音ばつし〳〵。拍子木取て後見の。役目も相應狂言の。地程よくかたな打落され。フシうんとのつけに反返る。地此物音に藥師寺も。合點行ずと差出す燭臺。死體に毛氈。詞吹消す蠟燭。地跡をくらまし。三重へ行そらの。

第六

地都の雪はつめたきにわけて。つめたき フシ立君の憂勤。地諸事の哀を調へる夕ぐれごとに打連て。身を賣に出る厚化粧白壁作りの藏屋敷は。藥師寺治郎左衞門の七條の一構。惣嫁三代賣兼る材木小屋の普請場が。フシ十文宛の揚屋なり。詞コレお君殿は。此樣に雪がふつて。今夜は定めて淋しかろ。ヲヽお百殿。夕べハわしもお茶引て。親方のふくれ頰。したがこなたは商をようするが。どふぞ祕傳見が有るかいの。サア。くらがりでする商なれば。器量にはよらぬ。男はあまい者なれば。床へ入て念佛を申にも。鼻聲でぶつ〳〵いへば。よいか〳〵と根問して。地毎晩毎晩打て遊びにくると。年寄フシ惣嫁の傳授事。地屋敷の內より仕事仕舞て日雇手傳。詞ハアもふ色共が出かけおつた。持合せが有るならば。誓願寺の竹田見ると思ふて。十文がの買ふ物。ヲヽいしこ。毎晩々々なぶつてじや。ちやつと往んで錢の出ぬおかたを抱てねやしやんせ。テモえらい腮な惣嫁共と。地鋤鍬背負打かたげ。フシ皆ちり〴〵に行跡に。地一人の手傳立戻り。そこらを見廻し懷より狀箱取出し。人の見ぬ間にこね土の。中へ手早く押込で何の相圖か白紙の。フシ目印立て立歸る。地暮六ツ過て七條の。相場戻りも手が合て。救ひ取たる六條の。御堂下向の譚

門が。十德控へて。詞コレ申。出かけじや遊んでおくれんか。イヤ〳〵おれは隱居して。席破ももふ過た。振袖を着たちいさい娘。いかに世業なれば迚。突付賣で錢設は。おいらが宗旨のおふみ樣に書て有る。あなかしこ〳〵。南無あみだ佛と。地ちよこ〳〵走り。伏見戻りの萬歲が。鼓片手に米袋フシかたげて歸るを。詞萬歲樣〳〵と地呼ば呑込む早合點。詞アイ舞ますでござりませうと。地聲はり上げ。德若に御萬歲。ありけう有けるあら玉の。べれべんがべれ〳〵べん。〳〵。べれ〳〵べんのべつとこさ。べれ。べん。〳〵〳〵〳〵。詞ア、舞んせじやない。買んせじやはいなア。ア、こりやこなたは物嫁じやの。ハテ旦那衆と思ふたれば。そう。かでも愛敬の地ない顏で。一日あたふた舞まふて。設溜た。此錢をそつちへせしめふとしらるゝは。誠にのぶとう候ひけり。こんな所に。べれべんがべれ〳〵。べん〳〵。べれ。べん。〳〵〳〵〳〵。詞ヤべらつこふより早ふいぬるが。地德若に御萬歲と。フシ袋かたげて逃歸れば。地けたいの惡いけち萬歲と。フシつぶやく折から。跡へ肩臂いかつい風。氣儘上るり出次第に。定光は信濃國うす井の生れ。綱は。フシむさしのみたの者。地扨公時は伊豆國とは申せ共。生所もしれず宿なしと。みす〳〵見へる。フシから素見。詞ホウ今夜は隙かお百。遊んでやらふかい。惡口計いはず共有なら遊んで。わりやおれを見立たな。コリヤわいらを買程は。かたかはの所でひらいこをして來た。地そんならごんせと大工小屋。鉋屑の敷ぶとん。ドリヤあたゝまらふとフシ連て行。地お君は一人ほつしりと。ア、儘よ。出舟が有れば入舟も有るが浮世のフシ習ひもない。地かけにはならぬと床の中。わつぱさつぱとわめく聲。客は手に紙持ながら。いちもんぐさにかけ出せば。お百は帶をさげながら。着物ほら〳〵走り出。詞あられもないもの盜むから。何盜もふも知まいぞ。おのれが親にも持そな物を。地くらひ逃する卑怯者。かへせ。戻せとちやり仕舞。跡はフシ笑ひに。成にけり。夜も早五ツ。フシいつもの時分。地宵に人目を忍びの勤。なりと。所體は黑白の雪に。上着の黑もめん顏は殊更十文の。フシ惣嫁に惜き器量なり。詞ヲ、雪ふりて冷るのに。內のぼんに乳呑して。今夜は休みやさんせいで。サそふ思へど出

ずに居れば。何やらかやら足はぬがち。ヲヽそふ有ふ。したが今夜のまんも知れた。此小びつちよは賣もせず。まん直しに一ぷくせう。お君殿サアござれ二。地二人打連普請場へ。フシ入さの月も雪空に。地二ツば履て來る足音。よい客そふなと立寄てなでて見れば絹着物。羽織ざはりも奥島の。奥床しく。詞申しお遊びなされぬか。いや〳〵おれはこなた衆を買て遊ぶ者じやない。されば。わたしもそふ見請ました故。御仁體を見かけて。少お頼申たいと地恥かしそふな物ごしも。顔も姿も十人並。詞こなたは内が術なさに。忍んで勤するのじやの。ア、笑止な事じやのふ。それならば遊びませう。それはまあ〳〵地お嬉しやと伴ひ這入番屋の内。太鼓枕の起臥も。フシ是も世に住むうき身かや。地客もおりゑも割膝にて。詞ちとお頼申たい。と申は別の事ならず。わたしには夫の有る身。拝の爲に旅行。年寄れた舅御の。長々の煩ひに。獨の子が重い疱瘡。貧しい暮に二人の介抱。地夫故わたしも此勤。詞何共申兼たれど。どうぞ枕をかはさずと。地親子四人助かる樣に。お情頼上ますと。顔も得上ずしやくり上。フシ涙と倶に頼むにぞ。地客もおろ〳〵目をすつて。詞ア、ひよんな所へ來て。悲しい咄聞ました。幸爰に持合せた金一歩。不足にあらふがどふぞして。是で二人の病人を介抱してやらつしやれ。疱瘡も山を上乗るなら。有合せたうにかうる。あすの夜持て來ませふと。地金を渡せば押戴き。お客樣の此御恩と。手を合すれば。詞ア、これ〳〵禮には及ばぬ。おれもちいさい子が有る故。身につまされて進ぜる金。今夜は雪もふる程に。早ふいんで疱瘡子に。乳をのましてやらつしやれと。地つどつどに心を付。金やりながら手も握らず。フシ涙こぼして歸りける。地おりゑは番屋を門送り。金押戴伏拜む。フシ向ふへとぼ〳〵來る親仁。懐ずつしりよい客と。傍へ立寄コレ申親仁樣。ちつと遊んで下さりませと。言へばしくしく泣出し。地ア、こなたはよい氣じやのふ。年にこそよれ色所じやないわいの。懐に入たのは錢銀ではない。是見さしやれ。乳のない子寶じやと。地涙ず丶つて聞て下され。詞此坊主は。おれが孫で此月が誕生日。て丶親はとうに死ぬる。去年產後で此子が母も。鳥部山の煙と成。夫から祖父が囉ひ乳で育上。今も囉ひに行ますと。地なく〳〵咄

せば聞くりゑも。フシ身につまされて。詞ア、夫は年寄ておいとしや。幸わたしも乳がはつて難義致せば呑して上ふ。地お前を留たも宿世の縁と。いふに立寄フウ。アノ惣嫁様にもお子が有るか。詞やれ〳〵、忝や。コリヤ泣な〳〵。乳を呑そとおつしやると。地懐明れば抱取。詞ヲ、おのこ子そふな。おばがうま〳〵呑しませふと。地乳にさはれば悦ぶ子。いづくの人の乳ぞ共。知でフシ呑付嬉しさに。詞ア、結構なお惣嫁様に逢て。ほんに孫は仕合者。出かした出かした。もふたんと呑ましたでござりましよ。サアふつゝりせい〳〵。又あすの晩參りませふ。お前の御商賣の肌をあらはになさるゝはいかひお慈悲。アゝわたしがなあ。マア十若ければ。お禮の申し様も有れど。夫もいふて叶はぬ事。せめて冥加の爲。申し錢を十文上ませう。何の夫には及びませぬ。ドン〳〵ついでにだん〳〵さして上ふ。ムム是はまあ何から何迄お心付られ。忝なふござります。ヲ、よい時分でござりました。ヤレ嬉しや〳〵。サアこつちへ下さりませ。今夜はよふ寢るでござりませふ。そんならもふお暇申ませう。お出なさるゝか。アお年寄のお奇特な事や。怪我なされなへ。ハイ〳〵。よういふて下さました。てうど此孫めが母が其様に。氣を付てくれましたと。何に付ても。地思ひ出す他生の縁のうき別れ。ねんねこや〳〵。ねんねこねゝことフシ立歸る。地みたらしの水の流と人の身は。浮ぬ沈は様々に。くだはれ〳〵下はれませと。河原傳ひに來る非人。人絶待てそろ〳〵と紙の印は爰こそと。こね土に埋んだる。以前の狀フシ箱堀出して。地めんつの底へ手早くも鍬追取て堀かへす。河原の砂も身にかからぬ。おりゑが見る共したんだる焉包。埋隱すを盗だ金と見るおりゑ。小屋の内より出る惣嫁に。驚く非人はそしらぬふり。下んせ〳〵下はりませとめんつかたげてのつさのさ。フシ河原を上へと行過る。フシ又一としさり降る雪に濡しほたれて浮橋もこけつ轉びつフシ走りつき。詞申し〳〵。見りや皆様も此かはらで。勤なさるゝ女中そふな。わたしは祇園町邊で。浮橋といふ勤の身。様子有て内を出て。跡より追手のかゝる者。見付られたら死ぬる覺悟。お前方の情にてかげを隱してくださんせ。アレ〳〵あの挑燈がわしを尋る人そふな。地皆様賴上ますとフシいふより外

は涙なり。詞ヲ、よし〳〵氣遣ひさしやんすな。勤する身は相互。わしら二人がかくまひましよ。どこがよからふどうせうと。地いふ間程なく追々にかけ來る祇園の茶屋入方。挑燈てん手にコレ色達。詞今爰へ年比は十八九な女郎。色は紫。江戸づまの着物着て。此道筋をこなんだか。イヱ〳〵宵から爰に居れど。そんな女子はお君殿。さつきにから見やせぬな。はて面妖な。どふでも爰へ今來た筈と。地傍に隱れて居るぞ共。白雪踏立男共。コリヤ〳〵此普請場が氣ぶさいなと。弓張先に丸太のかげ。鉋屑迄搜せ共。爰には見へぬと フシかけ出れば。地お百は亭主にわゝりかゝり。詞コレナお前方。あの小屋はわしらが寢所。斷なしに家搜して。いぬでは濟ぬ。勤に高い低いはないぞへ。粹な商賣して居ながら。公界する者潰さんすか。地夫ではわしらが立ませぬと。白粉のへげる程顏 フシふくらしてねちかくる。詞是は 尤 誤つた。氣のせく儘に斷らぬはおいらが不念。イヤコレ〳〵、不足にはあろけれど。二人の中へ遣ひ錢。ころりと往んで寢て下され。サア是からは高瀨の方を。地尋て見よふと打連て フシ河原を西へとかけり行く。詞さつても冷いなつい後に隱して置たにうつそり共。したが宵から錢見なんだによい仕合。お前も仕合サア爰へと。地いへど浮橋身は冷汗にひへ凍へ。寒さこはさにふるひ居る。詞ヲ、寒ごんしよ。わしらが仕付た勤でさへ。此雪ではたまらぬと。地小屋の木屑を取出し火燧かち〳〵吹付て。松梅ならぬ伯人に焚火を フシあてる深切を。地悅ぶ浮橋番屋よりそろ〳〵出て顏と顏。詞ヤアおまへはおりゑ樣。そふおつしやるはおむつ樣。地是はと焚火打けして顏も得フシ上ず袖覆ふ。詞ム、お前方は近付そふな。アイ久しう逢ぬお方。ちつと咄したい事も有り。お百樣待ずといんで下さんせ。そんなら先へおりゑ樣。又あすの晩。地さらばへと鼻歌。諷ふて フシ歸りける。地人絕すれば浮橋は。おりゑが傍へさし寄て。詞マア何から言ふやら聞たいは。とゝ樣の御病氣。母親は長々のお氣扱ひでお勞はなされぬか。太市は定て惡さ仕やつて。地お前のお世話とかきたくる程問かくれば。詞アイ皆樣はかはらねど。變つたはお前の身の上。屋敷奉公と思ふたに。こりやどふでござんすへ。サイナ。とゝ樣の長の御病氣。兄重太郎樣は。お國の騷動からお歸

りもなされず。お前も兼々しつての通り。常に不自由な其上に。藥代の何の迚。いかぬ世帶を見る悲しさ。とゝ樣には深う隱し。かゝ樣と談合して。祇園町へ勤奉公。わしは獨身お前は現在兄樣といふ殿御持ながら。見ればさもしい河原の勤。とゝ樣やかゝ樣は。知てござつてなさるゝのかと。地問れておりゑは差俯。恥しいとフシ悲しさとしばし。詞もなかりしが。詞祖父樣は長の煩ひ。かてゝ加へて太市郎は重い疱瘡。ばゝ樣一人うろ〳〵と世話なさゝるがいとしぼく。ほんにさもしい事ながら。ばゝ樣も此りゑも。毎夜々々帶しめて。寢た夜は數も限りもござんせぬ。餘り見る目が悲しさに。夫へ立ぬと思ひながら。帶をとかぬが私が潔白。太市が疱瘡の願込に。祇園參りと僞つて。毎晩毎晩此河原へ。身は汚されど心を汚し。地僅なおあしを貫溜。貧苦を凌ぐわたしが心。推量して下さんせと。聲をも立ずしめ泣に。歎けば俱に浮橋も。身の悲しさをかぞへ立手に手を取て諸共に。涙の袖はフシ加茂川の猶も。流の身とならん。地浮橋漸く涙をとゞめ。詞わたしも不思議に殿樣の弟御。縫殿之助樣にふと馴初。言かはせし事迄も。反古と成て逢れぬ品。夫故に若殿の跡を慕ふて今宵の欠落。ヱヽ夫は閑捨られぬお前の身の上。爰は往還五條にわたしが知邊あれば。何かの咄はマア後に。追手が戻つて見たれば難義。サアわたしも夫故心がせくと。地互に帶をしめくくり。非人が埋し砂の中。心にくしと目印して。五條渡りの軒のつま裾もほら〳〵フシ走り行。地時々廻る番人の。屋敷のめぐり拍子木の。音もさへ渡るフシ夜嵐に。フシつれてふり來る。雪日和つもる事共咄し合。歸るおりゑは目覺の河原はそこかかしこかと。うろ〳〵と見廻る中。おりゑの姿あやしみて一犬吼れば番小屋の。廻りに伏たる數多の犬。吼かゝるをば追のけ〳〵。有合ふ鍬にて掘かへす。土は白妙ふゞきの浪。猶ふりしきる雪あられ人の見ぬ間とかきのくる。雪も我身の罪科も。積らばつもれ金ぞと見たる身の慾心。せき立心も鍬の双も。念力通つて掘當る。地夫と見るより以前の非人。詞ヤア其こも包を取ふとは。のぶとい女と突退れば。又取付を引たくり。すがり付を蹴飛し蹴飛し。いや〳〵〳〵地金輪際放さじと。俱に引あふ雪明り。互に見合す顏と顏。詞ヤア女房か。重太郎樣か。ハア

地恥かしと逸參に闇は。あやなし。三重へゆく道の

第七

地昔は馬に鞍馬口。今は妻子の飼料もかつ〳〵成し素浪人。矢間喜内が老病重きが上に疱瘡子の。熟の指引わんぱくも。フシ常よりいとゞいぢらしく。地近所の見舞相借屋の洗濯婆さま頬赤き。猿廻しの丹兵衛茜屋のお内儀フシ迄紅絹の衿付脹しゝ。詞どなたも〳〵いかひお世話。ヲヽばゝ様嬉しかろ。始の間は悪い出物で。皆きつう案じたがモウこつち物。神様も機嫌よふ今日でお立。ソレ〳〵。イヤ又神様もこんな不自由な所に長居は成るまい。アノ喜内殿も長い病氣。ありや貧乏神の神造りはせすば直るまい。知行取の果じや迚。此様に無商賣では濟まいぞや。いつそあの疱瘡子連て。橋の上へでも出やしやつたら。よい知行に有付ふに。アヽ丹兵衛様のめつそふな。おりゐ様といふがせいな嫁御が控へてじや。サア〳〵もふ歸りましよ。ヲヽそふせう。コレばさま。疱瘡見舞の持遊びは必捨ずと人形屋へおろして。小遣の足にさつしやれと。地念比ぶりに氣を付て。フシ皆々打連立歸る。地加茂川も。いぢの小川も月やどる。流は同じ二人連。地おりゐは門口指覗き。嬉しや誰もないそふな。サアござんせと手を取しが立留り。詞おむつ様頼事が有わいな。わたしは夕べ祇園様へ參るといふて出た程に。アノ七條のかはらに居たといふ事。舅御や母様には必いふて下さんすなへ。アイ〳〵。ほんにわたしも頼が有。とゝ様御浪人の後。一文字屋へ賣れて。浮橋といふ事は母様一人の御了簡。物がたいとゝ様には深ふ隠して。屋敷方の奉公といふて御座んす。必沙汰なしに。ヲヽそりや合點じや。したが風俗なら詞付なら。其びらしやらではつい尾の出そふな事じやぞへ。イエ〳〵。そこはぬかる事じやない。とゝ様に逢たら前の様に。隨分堅ふ三ツ指と思ふて居ながら。里の癖が寫つたは堪忍仕ゐ。其堪忍しがモウ悪い。ホンに喈といふ下から。口がすべつてヲヽ笑止と。地笑ひほころぶ梅花の口。フシ堅く閉たる障子の内。

地しはぶきの聲諸共に。父の喜内枕を上。嫁戻りやつたか。孫めが待て居つらふに。早く歸りは仕やらいで。アイ。そふ思ふて心せく道。おむつ樣に出合何やかやつもる咄しで。何じや娘が戻つた。ヤレ〳〵久しやどこに居るぞ。ハイ是にをります。とゝ樣喜内樣お氣もじいかゞお伺ひに參じましてござりまするでござんすと。地折目高なる武家挨拶も。どこやら　フシしどけなまめける。地聲聞咎め母は立出。詞ヤアおむつ何としておじやつた。サイナ母樣。あんまり懷しさに。勤め中を漸と。イエサア屋敷の勤の中を。際貫ふて參じました。成程々々。そなたの勤て居やる屋敷は。堅い屋敷じやと聞たが。つい其樣によう出られたの。髮形も美しう。地立派なを見るに付ても。心の苦勞が思ひやらるゝ。詞聞ば嫁女と連立て戻りやつたげなが。道で今あやつたか。アイ夕べ河原でアゝコレおむつ樣。いかにもかはらぬ無事な顏を見たも。毎晩わたしが日參する。祇園樣のお引合せ。ヲゝそれ〳〵。祇園樣のお社で。それはそれは難義な事が有てな。ムゝ難義な事とは。惡者にでも迫れてか。イゝエイナ。ありやおむつ樣の言樣が惡さ。難義といふはな。道中で俄雨。イヤ雨ではない俄雪でナ。アイ〳〵。其雪にあふてはならず隱れふ所はなし。幸の材木でもない鳥居のかげに。お前が日參してござんした。いかひお世話でどふやらかうやら。御恩はきつと忘れぬぞへ。アア是わたしへの御挨拶より。とゝ樣のお傍へ行て。ソレ行義な屋敷の式作法をナ。地お咄なされと氣を付られ。詞ハイ取て居まする。誠に久々のお疾ひに。殊のふお腦も遊ばさず。御機嫌よいお顏を拜し。せいもん悦ばしう　地存じまするとフシ述ければ。地喜内何の氣も付ず。詞同じ屋敷奉公ならば。先君のお傍仕へもさせんず物。お家は沒落我は長病にて行歩叶はず。悴重太郎何國に吟ひ居る事やら。まだしも老の樂しみは孫の太市。疱瘡も山上仕廻ふたれば。大役濟だ出かしたな。見やれ賢い目元でないか。道侍の子迚疱瘡の中でも。浦嶋やお山人形のぬかつた物は大嫌ひ。公平の人形の顏の赤いは出物の藥。通功の兵に。地成兼ぬ利口者と。フシ子よりも孫に餘念なき。詞ヲゝかはいそふに。したが今年は並がよいげな。よい時美しい事仕やつたの。ほんにマアおりゐ樣。此樣な疱瘡子の有のに毎晩々々

よう日參なさんすのふ。又かいなそんな事わしや聞たうないと。地ひや〳〵思ふ嫂に。言損ひの機嫌取。詞ドレぼん抱てやりましよか。伯母が着物もあつかじやぞや。サア赤いはよいが。地しどのないのにこまつたと。疱瘡の禁句くろめ兼。ぜひも　フシ納戸へ連て入。地弓矢は家に傳へても今は仕へん君しらず。羽なき矢間重太郎羽織野袴大小も。フシ昔に返る立派な骨柄。地頼ませうと家來が案内。詞おりゐ誰やら見へたぞや。アイと　地何氣もなつかしい。夫の顔にはつと計。出て逢たさも面目涙　フシ胸に痞の上り口。詞何をうち〳〵して居やる。どなたじや是へ。ヤア重太郎か。母人先は御堅勝で。其挨拶はゆるりつと。マア〳〵内へ這入りや。よう戻つてたもつたの。何やかや咄す事。ぼんが疱瘡してのう。コレ嬢。抱て來て顔見しやいの。何をうつとりとして居やる。ムヽ餘り嬉しさに氣上りがしたの。茶も汲でおじやいのと。フシ母の悦び。詞イヤ〳〵お構ひ下されな。ヤイ關内。身も際は取ぬ。暫くの間旅宿へいて待てをれ。何か指置親人の。御機嫌いかゞと手をつけば。地喜内もにこ〳〵打ほゝ笑。詞浪人の尾羽を枯し。旅やつれも無あらんと思ひの外。顔色も健。衣服の美々しさ。かはらぬ體に先は安堵。ハツア成程。其御案じも御尤。拙者も方々とうろたへ。此儘に朽果んかと存じたに。いまだ武運盡ず宜しき主取を仕り。御覽の如く身の廻りも主人より拜領。則且那の御供致し。鎌倉へ罷下る。折から親人御病氣の樣子。承はつて心ならず。立ながらちよとお暇乞。二親を預り長の月日。無女房も心遣ひ過分々々と。地常にかはらぬ夫の顔色。機嫌能のも疵持足の。裏ではないかと。案じ居る。地喜内いざりし膝立直し。詞ムヽ奉公の口有て。知行に有付たとな。ヤイ重太郎。女は二人の夫を持ず。侍は二人の主に仕ゆるを。人非人といやしむ事。母の胎内を出るより。腸にしみ込て有る事わりや忘れたな。其根性とは知らず。妻子を捨親を捨て。再び家にも歸らぬは。遁悴は武士なりと心の自慢。親の病氣の見舞に來たさへ不覺者と思ひしに。二君に仕へて其くさつた魂の。大小をひけらかしに來たか。此喜内はな。貧苦には迫つても。重代の具足は質にも入れず。口惜や行歩自由ならば。古主の御無念を晴さん物と。牙をかんで日を送る。地いざりに

おとつた大腰ぬけ。對面も是迄。女ならば密夫同然。身の穢れた犬畜生。長居せば手打にすると。老の怒の一筋も。若し我事を知てかと。女房が胸に二ツ玉　フシはたと。立切一間の中。地思案を極め重太郎。お暇申すと立上る。詞コレ待てたも。なんぼ親でも今の惡口。腹の立は道理〳〵。もぎどうなは日比の氣質。そなたの有付も孝行の爲じや物。あゝ言はしやつても底心に。何の惡ふ思はしやろ。何事も了簡召れ。イヤサ拙者も急の御用。隙取は主人へ不忠。罷歸る此後は。最早お目にもかゝるまい。ハテ氣の短い。急ぎの用なら留はせまい。が割ない無心が有るはいの。そなたが他國めさつた後は。何をたつきに世を渡らふあだてもなし。地道具諸色も賣拂ひ漸嫁女の賃爲業や。乳呑子かゝへて人に雇はれ。夫は〳〵憂艱難。口でいふ樣な事じやない。詞喜内殿の病氣の上に孫が疱瘡。人參と熊膽で。仕立にやならぬ煩ひに。地常の藥の才覺さへ石で手詰た貧の病。旅の遣ひは有合とやら。親子の中でも金銀の無心はどふやら言惡けれどのふ嫁女。詞アイ〳〵。よそ外の事ではなし。主じや迚何の否がござりませうと。地いふを打消。詞ハテ扨コリヤ何をいふ。最前御老人の詞何と聞。親子の緣はもふ切て有るわい。尤路銀は貯へたれ共。主人より頂戴の金子。一錢もみつぐ事ならぬ。嬉しや今日といふ今日。やつかいを拂ふて心がさつぱり。地義理もへちまも一本立。女房そちにも隙くれた。詞イヤサ驚く事はない。科の子細を言聞せば。却て身が武士が立ぬ。他人に何にも聞事ないと。地ちりはい付ねば母親は。顏打ながめ。詞是は又きつい思ひ切。尤てゝごへ不足は有ふが。嫁に何の科が有る。そふ言ずと機嫌直して。どふぞ今日一日逗留して給も。嫁女留みやいの。氣の付ぬと。地樣子しらがの氣をくんで。涙かた手に夫の傍。水の出端へ茶の端香。そつと指出す追從も。身を捻向て雛面顏。取付嶋もないじやくり　フシ詮方なさに雅子を。抱て出ても見た計。愛相なければ恨めしげに。詞コレ太市。とゝ樣が戻つてじやわいの。ヲヽ抱れたかろ〳〵。なんぼ抱れたうても。とゝ樣はだきやさつしやんせぬ。侍の立ぬと言しやんすも。成程無理とは思はねど。地不甲斐ない女の手一ツで。お宿老のお二人に御不自由なめがさしともなさ。いろ〳〵樣々に身を碎くは。詞大

概お前も推量してくれたがよい。身にくもりない言譯がしたふてもどふもならぬ。腹が立なら堪忍して。地太市はかはゆふないかいな。お前計出世して子はつかゑても構はずか。つらい貧苦を少でも思ひやりが有るならば。三ツ四ツの重ね着を一重は脱で朝夕の。煙の代にとおつしやつてもさのみ惜ふも有るまいに。餘りむごい愛相づかし。左程難面お前でも此子が親と思へばこそ。毎晩熟のうは言にも。とゝ様呼でと泣わいの。詞コレどふよくな爺御の傍へいて。母が佗言してたもと。地押やれば這おりて。とゝ様のふとすがり付。恩愛血筋の一聲は名作の鉾に双付らるゝ如くにて。鐵石の様なる重太郎涙をこたへ。兼けるが。氣を取直し突のけて。詞親の事さへ思はねば。まして悴が事何共思はぬ。緣切て仕廻ふたれば。薫かぶらふかつゑやふが。此方に構はぬ事。地くどう言ふなと睨付る。母は興さめ。詞コリヤ重太郎。扨も〳〵今迄は。又とない孝行者と思ふたが。貧い親を見限つて。一人榮花をする氣じやな。ヱヽ見違へた道しらず。浪人すれば其様に。さもしい心に成物か。望の通り親子でない。勝手次第に出て行おれ。地子と思はねば恨はないが。天道の御憎しみで。身の行末が思はるゝ。ヱヽ淺ましい人でなしと。きせる打付聲ふるはし。詞アノ畜生に構はずと。嫁地こちおじやと計にて。フシ恨なく〳〵立て行。地返答もせず表の方。出行袂を女房引留。詞去れた夫をとめはせぬが。出て行氣なら此子を連て行しやんせ。ヤアたわけ者。去たからは子でもないわい。イヤ〳〵。里の子は男に付世間の大法。水仕奉公してなりと。お二人を養ふに。此子が有ては枷になる。せめて疱瘡子の介抱は。親の不肖じやさしやんせと。地門へ突出しびつしやりと。さすが氣强ふ言ひながら。戸の透間より差覗き。詞コレ夫が迷惑なら。今一度思案仕直して。立戻る氣はないか。地心づよやとかつぱと伏し。聲も得上ず忍びねの。心奥より父の聲。おりゑ〳〵と呼ぶ聲に。アイ〳〵。そこへと言ながら。我子に名殘後がみせはし泣間も姑が。嫁女々々に是非なくも　フシ思ひ切てぞ奥へ行。地さしも義づよき重太郎も。我子のかせに縛られて。行も得やらず抱しめ氣はくらやみと成にける。地折からすた〳〵せきに關内。詞餘り時刻が延ますから。大鷲様小寺様粟田口迄

早御立。拙者も御兩人の御供。ぶ躾ながらお先へ參ると。地いひ捨て引返す。なむ三寶おくれしと傍輩の嘲り何とせんと。顛動散亂納戸口。病の床を這出る父の喜内が探り足。隔ぬ中の内と外。太市郎が肌押寃げ。口に稱名手に小柄。胸を極めて眼を閉。突込む鋒。雅子の只一聲に息絶る。死骸と俱にどうど座し泣聲。一度に父喜内。重太郎出かしたとわつと計にむせ返る。はつと驚き立上る。ヤレ待て暫しと戸をひらき。詞古主の爲に親を捨。現在の子を手にかくる。其丈夫な魂では。敵師直を討損ずる事あらじ。ヲ、夫でこそ我子なれ。天晴忠臣　フシ出かしたり。地忠義の旅の餞別せんと。懷中より金子取出し。詞コリヤ此金わな。主君御生害と聞より。直に彼地へかけ付んと。旅の用意に貯へしが。計らず老病指發り。空しく引籠有ながら。地此年月の貧苦にて。醫渦え死る共。忠義の金には手をかけまじと。女房嫁にも隱した路金。フシ御用に立ちやれと投出せば。地重太郎飛しさり。詞ハ、ア劃符を合す忠義は一體。拙者も爰に五十兩。此金は大星殿より配分の用金。私事には遣はれずと。母にも難面もてなせしが。地父の心を籠られし其金子を申受。肌身に付れば親人も。敵討の御供ぞや。詞又此金子は御老體へ。拙者が寸志の置土産。悴が追善佛果の爲。お賴申奉る。地扨も〳〵武士の義理程つらき物はなし。詞連判の侍小寺大鷲拙者なんど。彼師直に好有る藥師寺が城中へ或は日雇乞食に身をやつし。鎌倉の樣子聞繕ひ。大星殿へ日毎の内通。親妻子にも語らじと。地誓紙の手前母人にも包し段はまつぴら御免。大事をかゝへて古郷へ歸る不覺者と最前の。御異見肝に銘ぜし故。手にかけし躰は主君の追腹。未來の先陣よくしたな。追付敵を討課せ直樣切腹仕り。冥途より吉左右を申上ふ親仁樣。ヲ、必待て居申すと。親子手に手を取くんで。思はず知ずはら〳〵と　フシ嬉し涙の暇乞。地障子の中にもわつと泣。聲に悔り立退ば。詞のふ重太郎。女房子にも隱す大事。母も出まいと思ふたれど。おりゑが自害しやつたわいの。死顏に一目暇乞。それ程の事は不忠にも。地わしや成るまいと思ひます。おむつ爰へと二人して。舅て出たる亡骸に　フシ書殘したる藻しほ草。地浮橋取上げ涙ながら。詞と〻樣か〻樣へ申殘しとり。先立いは不孝にいへ共。夫の心底立聞致し。恨

は晴て此身の申譯立がたく。是もお二方おみつぎの爲。淺ましい立君の世渡り。ヤアそんなら御父殿のかい病に。賤しい辻君の勤まで仕やつたかいのふ。往來の人に合力を受。肌身は汚さずいへ共。夫の疑ひを受。是のみ迷ひの種に成り。わけて悲しきは太市郎。疱瘡もかせ口に成り。悦ぶ甲斐もなきわかれ。ヲヽ道理。生長有る子を殺して。何の生て居る心が有ふ。かはいや〳〵。一ツ今朝買て歸りいてんぶの曲物。膳棚に御座いと。とゝ樣のさいの物にお上なされ下されい。一ツ裾の切し私が袷。ぼんが餘所行に縫かけ置いが。心がゝりにいい儘。死骸に着て御葬頼上り〳〵。御介抱申人なく。御不自由の程いか計り悲しけれ共。一時も早ふ冥途の殿樣へ。夫の心底申上るを樂しみに相果い。重太郎殿へは面目なさに。何事も書殘さずい。めでたくもの　フシ終り迄。夫に立る眞實の又と類もない貞女を。一日安堵の思ひもなう。辻君と迄身をなして朽果させしかはいやと。むなしき死骸に抱付　フシ前後不覺に取亂す。地喜内涙を押拭ひ。主人の爲なればこそ傾城と成非人と成立君と成る心遣ひ。個程の忠臣重太郎を子に持た此親仁。我もちつ共悲しうない。死しての跡の　フシ名こそ惜けれ。詞祝ふてめでたう別れの盃。おばゝ　地つぎやれと取上て。奥歯もれくる謠聲。詞げに名を惜む弓取は。誰も斯こそ有べけれ。あらやさしの我子や健氣やと。泣ぬ顔する爺親の。にこ〳〵顔も此世の名殘。ハヽア仰にや及ぶべき。詞我子のほだしを切たれば。心の鐵石十倍增。主君の敵の其上に。妻の敵子の敵。一時に討門出と。思へば心にいさみ有。地たとへ天地をかける共。念力通つて師直が。首提んは膨〳〵内　フシ早おさらばと立上る。詞最ふお往きやるか。やがてめでたう吉左右〳〵。地其吉左右とはいとし子が。命を捨に行く旅路。冥途の案内は嫁と孫三途の川を急ぐらん。かはいと見やる野邊送り。フシ今朝は祝ひし。神送り。門に捨たる猩々も。涙の種の笑ひ顔しほれいさんで。三重〳〵出て行。

第八

詞藏の内の財は朽る事有り。地朽る事なき身の内の。財を在所に引籠る。由良之助が身の置所。都離し山科に世間構はぬ我儘暮し。只けんやくを第一は。フシ石に根繼の藏普請。自身手傳ふ壁塗の。左官がこてへ指付る土によごれし仁體は。始末なりけるフシ物好なり。地折から戻る一子力彌。父が前に手をつかへ。詞日の暮る迄御精出されぬ御草臥。最早お休なされませ。ホヽ息子殿お歸りなされたか。アヽ氣轉の利ぬわろでは有はい。日暮前の仕事はちと成とやり過して置が明日の爲。今時分に休むと今日の仕事はつい是切。けふ一坪仕殘すと。せんぐりに夫が延て。末に成と一日の手間が違ふそこらへ傍へ氣が付ぬと。物ごとに費が多い。イヤかうはいふ物の左官殿。けふは是切。明日は又とうから精出して貰ひましよ。然らば左樣に致しませふと。地足代とんとフシ飛おるれば。詞アヽコレ腹の減た上を其樣に飛と一ばいへる。へる分は構はぬが大喰が術ない。さつても吝い旦那殿。そんなら明日からこつち飯に致しましよかい。いか樣そつち飯もよからふが。願はくば作料もそつち作料にして貰ひたい。ハヽヽハヽヽ是はかゝらぬ。かゝらぬ事を言ふより。壁下地程すいた腹へ。白壁を塗こめて。地いんでこまそと左官は勝手へ由良之助。力彌も俱に落散る道具。フシ取片付る入日影。七フシ光有る御主人の。在時さへ足輕のかるい。身分を浪々の今は足より身のかるき。寺岡平右衞門が女房おきた。我子の手を引きおず〳〵と切戸開いて庭の内。願ひ有げにフシ手をつかへ。詞あなた樣が由良之助樣でござりますか。ついにおめ見へ致した事はござりませねど。地お聞及びもござりませう。私は鎌倉のお屋敷を勤てをりました。詞足輕寺岡平右衞門と申者の女房悴でござりますと。地聞てふしんと思ひながら。詞ムヽ足輕平右衞門。エヽそりやずつと前方北國へお飛脚に往かれた。其足輕の平右殿か。ハイ〳〵左樣でござります。ムヽ其又お内儀や子供衆が何の用で我等が宅へ。ハイ參じましたはお願ひの筋。夫平右衞門參られまして。御訴訟申さるゝ筈ではござれど。長々の病氣。夫故女房の私が名代のお願ひと。半分聞ず。アヽやれ〳〵けふは草臥た。扨とけふの大工が。ドレ力彌。十露盤と。地取寄てしやに構へ。詞扨

左官が二人。大工が一人。此作料がこつち飯で三匁ヅヽ。是が三人で三々が九匁よ。あいら三人して一日に何ぼ喰ふぞ。二升は喰ふかい。是を八十匁の米にして。二升の代が二八壹匁六分。又汁に焚味噌の代が十五文。さいが八文のめぐろを五ツ切にして。一切が一文六分づヽ。是も三人で三文。三六一文八分。四文八分じやによつて是も五文よ。扨又焚物から香の物。鹽茶荒積りにしても一日に廿六七文いらふか。マア廿七文とせい。其上へ味噌の代が十五文。めぐろが五文。〆て四十七文。是を十五匁の相場にして銀に直せば。五七卅五。一四が四と。銀目にして七分一厘。爰へ一匁六分の米代と。九匁の作料合して見れば。アヽ都合十一匁三分一厘。設る事なしに今日も是程の物入。お取込の中へ心もない事ながら。地申さねば叶はぬ事。どふぞお聞なされて。詞コリヤ力彌。そちに言付た下京の家質の相談。彌極て歸りしか。イヤ其義に付て今朝より。あの方へ參り段々相談仕りました所。表口三間半。裏行廿間の家屋敷。銀高は六貫目。歩銀三分と申ましたれば。あの方から申ますは。家質の歩銀は一貫目に高々七匁か八匁の物。それに一貫目の銀に。一ケ月に卅匁宛の利を出して。家質に入て銀借者は。マア京中には有まいと中々相手に成ませぬ。何じや月に三十匁の歩を高いといふか。アヽ高ふはないがなア。一貫目の銀を錢にすれば。あら積にしても六十二貫。是を日錢廻しにして。一貫かして一日に元利共に十五文づヽの崩にして。百日が間に取切ば。一貫の錢が百日すると一貫五百六十に成。是を六十二貫かして見れば。かふつ。二六十二。六々卅六。二五十。五六三十。三十四貫七百廿と成る。是を銀にすれば。五百四十二匁五分。百日に是程の歩じやによつて。一ケ月にわれば。凡一貫目に百八十匁程。夫を家質なりやこそ。三十匁にしてかそふといふを。高いといふは根から算用しらずといふ物と。地高利貪る十露盤に。武士の業作は埃もなく。庭には取てつく嶋も。ほたへる我子を制するより。フシ外に詞もなき折から。地召使があはたゞしく。詞鎌倉よりの御上使として。餝間宅兵衛樣とやら御出なりと。地聞て力彌が立上り。詞コレ女中。聞る通りお客人も有。萬事は後程先々勝手へ立れよと。地いふを此場

のしほ〳〵と。詞然らば暫くお勝手へ。兎角宜しう。地お執成と我子の手を引き立て行。ハテ詞心得ぬ鎌倉の上使。ことによらばコレかう。地〳〵と耳に口。用意せよと力彌を立せ。衣絞繕ひ　フシ待間程なく押開く切戸口。間中間せばしと肩臂はり。のさばり來る餝間宅兵衛。こなたは禮義のおれそれも頻であしらひ　フシ上座に座せば。地由良之助慇懃に。詞先以て遠路の御上使。御苦勞至極と手をつけば。イヤ千里萬里も主命なれば是非なけれど。使者の苦勞を思ひやつて。格段の挨拶が有るは滿足なれど。そこら邊へ氣の付ぬ奴がござるさ。承はれば由良之助殿には。主人師直へ奉公が仕たいとやら。又お出入がしたいとやら。先達て京都にござる藥師寺殿より申越されしが。いつぞや腹切てくたばつた鹽冶判官。家國共に滅亡したを。主人が所爲なんど〵いふて。付ねらふやつも有る由。畢竟由良殿は判官の家老職。いかにしても誠しからず。此實否を糺せよと主人の言付。彌其義に相違なきや。返答いかに承はらんと。地髯張かけし。フシ上使の權柄。詞コレハ〳〵御尤なる御上使の一通。先達て藥師寺樣へ申せし通り。判官殿の短氣故。我々迄が殆浪人。此樣に引籠て罷有れば。友傍輩が折節參り。敵を討て亡君へ備やふの。師直の屋敷へ押寄ふのと。何ぞ命にかけがへも有樣に。夫は〳〵とんと返答にこまり入。藥師寺樣へ右の御咄。我等侍を相止め。少々の貯もござれば。其利德を以て渡世致したい。又師直樣京都のお買物。何によらず我等に仰下さらば。隨分下直に買廻して指上ん。さすれば。御奉公お出入も同然なれば。敵討性根のない事。おのづから世間へも知る。ホヽ主人師直公の耳へもいらば。心を赦し用心の繩張もゆるがせにさそふといふ謀で有ふがな。是は又きつい御疑念。此由良之助敵討所存ござらば。左樣に見透さる謀も致すまいが。兎角侍にうんじ果。藥師寺樣へお咄の次手ちよとお噂申たい計。遮て奉公もお出入も望まぬ某。ケ樣の上使に預らふとは夢以て存ぜぬ事。兎角上使のお執成宜しう賴存ると。地聞て彌〳〵のさばり聲。詞すりや何と言るゝ。敵討所存はないか。其筈〳〵。敵討といふは誠武士のする業。金銀を貯へ田畠を買求め。臓なぞを根强ふ建る腰ぬけの叶はぬ事さ。其樣な腰ぬけを家來に持た主も腰ぬけ。殿中を憚

らずそうらいしをひねくつて。おらが主人に敵たふとは。いやはや片腹痛いせんさく。其罰が忽當つて痛い腹。イヤまだしも切腹は味やられたげな。ア、其日は去々年三月十五日。檢使を引受鹽冶判官。麻上下のしほ〳〵と最期所に押直り。上使檢使へおれそれも。時刻や過んと肩衣刎退。三方取て押戴き。九寸五分を逆手に取。弓手へがばと突立右手へきり〻と引廻し。息も苦しくせぐるしげに。返す〴〵も師直を討洩せし口惜さ。骨髓に通つて忘られず。楠判官湊川にて。人は最期の一念によつて。生を引と言し如く。生かはり死かはり。恨を晴さでおこふかと夫からが狂ひ死。何と是でも敵討氣はないか。口惜ふも無念にも思はぬか。ヱ、張合のない腰ぬけだ。何にもせよ判官が家來。師直公へ奉公出入思ひも寄ぬ叶はぬ事と。地にべなき堅地のたばこ盆前に引寄空　フシうそぶく。こなたはわざとフシそしらぬ風情。　詞御上使の御退屈。誰そお茶持て來いと呼聲に。地はつと力彌が持出る。濃と薄いの井戸茶碗。上使の傍に差置て。フシ其身は次へ立て行。詞不調法な悴が手前。しぶくと一ぶくお氣ほうじと。地澁茶の挨拶しぶ〳〵頻。詞いやでござる。拙者茶は嫌ひだ。地そつちへやりやれと突やる茶碗。拍子にこぼれる一歩の山吹。惻りしながらそつと取上。詞イヤハヤ結構なお茶でござる。由良之助殿のお好。御子息の御手前。イヤモどふ共かう共。拙者元來茶が好でござる。其好を知ての御馳走。御發明扨々結構なお茶。銘は何と申す。大金雁金か。宇治の名物。ほんの是が山吹と申スのか。ハ、〳〵〳〵。イヤモずんど素茶でござれ共。お好ならば何ぶくなりと。アノ是を何ぶくもかへますか。是は〳〵忝いと。地手早に包む山吹の雁金よりは鷹の爪。摑頬はる鷲侍。イヤ詞何由良之助殿。主人師直京都の用事。萬端御苦勞ながら只今より貴公お世話下されぬか。是は〳〵忝い。前以て望む某。早速望叶ふといふも。偏に御上使の御了簡。何の〳〵。拙者遙々參つたは貴公の所存を試し。彌異變なきにおいては。京都の用事何か貴公としめし合せとの言付。しかし元は。判官の家來なれば是ぞと申す功をお立なされ。其功さへ立ならば貴公の望も叶ふといふ物。ナ。御得心が參つたかと。地丸ふいふても袴の肩衣角引立る　フシ餬間頻。詞ム、ぬけめなき御了簡。

去ながら差當つて當惑は。其功の立樣。ないといふのか。討つしやれ。イヤサ。判官が後家かほよ。一子爲若此邊に隱住由。此兩人が首身共が目通で。討つしやれ。いやと言へば古主の恩を忘れぬ汝。生置ては師直公の後日の怨。返答次第此場は立せぬ。地サア〳〵どうじやと詰寄て。詞尖き中の間より。うづ高蒔繪の厚盃物。目八分に持出る。力彌を見るより居住居も。ぐはらりとかはる。フシからくり的。詞麁末なる菓子でござれど。お慰に召上られて下されうなら添ふ存ます。何お茶菓子。是も彼山吹菓子かな。ドレ〳〵。ほんにお菓子だ。是をたべいで何と致さふ。拙者元來下戸でござれば。菓子が大好物でござる。何から何迄お心の付た。由良殿の樣な家來が一人鹽冶殿に付て鎌倉にをらば。判官も切腹には及ばぬ物。手前が主人も拙者と同じ事で大茶好なり菓子好なり。其好な物を一ぶくも盛なんだ故此成行。夫に違ふたなされ方。コリヤ其元の御子息な。イヤモ爺御に似て御器用はだ。何でござらふかい。今の樣に申した物の。畢竟かほよを討つしやるにも及ぶまいかい。かうなされ。判官の一子爲若計お討なされ。夫も此家に居ぬ者を今共申されまい。夜半の鐘の鳴時迄。拙者は奥で休ませう。其間にたつた一討。我らは其中御子息の御手前。何ばいも〳〵御馳走に預らん。夫は格別今申渡した通り。夜半の鐘をごんとつくと。爲若が首ぶち切て渡せ。急度申付たぞ。力彌殿。御案内。由良之助殿。後刻々々と。地一人して。呑込欲は井戸茶碗。菓子の器と兩の手に銀次第では主の首。討兼まじき大忠臣いかつがましくフシ奥に入。地始終の相手口先で。いふて居られぬ爲若の。噂にさすが由良の戸の。ふさがる一間フシそつと明け。地おづ〳〵出る以前の女房。遙こなたに手をつかへ。詞何やらかやらお事多い御中へ。又申上ますもお氣の毒樣ながら。最前も申ます通り。夫平右衞門長々の病氣故。憚を顧みず足輕風情の女房子が。押付ての御願ひ。地御聞なされて下さらば有難ふ存ますと思ひ入たる其風情。詞ム、合點參らぬは。ついに逢た事もない平右衞門。其お内儀。わざ〳〵と此山科を尋ね。由良之助に願ひとは。ヱヽ聞へた。夫の病氣と有れば。人參代なぞといふ合力の願ひか。イヤモ有合しさへ致そうなら用立ても進ぜたけれど。今では我等逼迫の

身の上。少々貸た銀は戻らず利銀はおこさず。此間迄天河屋の義平が子を養子に貰ふておいたれど。喰す事が太義な故。是も堺へ戻す程の身代。イヤモウ中々如才には存ぜねど無が有やう。ない所に長居せうより。又いづれへなりと頼有れと。地挨拶そこ〳〵立上ればマア〳〵お待なされて下さりませ。詞さもしい御奉公は致せ共。左様なお願ひに參る様な私共でもござりませぬ。夫があなたへお願ひは。鎌倉の御供敵討の御人數に。アヽこれ〳〵。いかに女子じや迚大それた事いふ人。其敵討にこり果た者。コレよふ物を合點なされ。敵討といふ物は。めい〳〵命を捨ねば行ぬ事。今の世界に我命を捨て。主の敵を討ふといふたわけ者も有るまいかい。とはいへ我等も其時は。討ても見様かと存付たが。イヤ〳〵。だふぞ敵を討て死なぬ様の。分別は有るまいかと。去學文者に尋たれば。唐子の晋の豫讓といふ者。敵の衣を切て主の仇をふくしたと有る。何でも是がよい手本と。夫から手を入れ足を入れ。漸〳〵と師直が定紋の付た着物手に入と其儘。主の敵思ひ知れと。づだ〳〵に切ちぎつたれば。敵討の帳面さつぱり消たといふ物。ア、どうでも唐の者のする事は利口な。千五百石取る由良之助でさへ其通り。ましてつくを米程取た足輕殿。師直は大名其身は下主。お氣にさへられな。下として上を計るは。そりやも天狗風に傘取れた様な物。もがいても埒の明ぬ事。よしになされ〳〵と。地相手にならねば猶もすり寄。詞是は由良之助様共存じませぬお詞。千五百石お取なされても。僅の切米を戴ました夫でも。今日女房子を養ひました所は一ツ。其大恩有る御主人様。師直故にやみ〳〵と御生害。御憤り御無念を。御家老のあなた様。よもやおめ〳〵なされてはござるまい。侍分の身でもあらばお呼出しにも預らふが。何をいふても足輕風情。お願ひにも御訴訟にも足腰叶はぬ大煩ひ。此儘死るは厭はねど。御主人様の御用にも立ず。やみ〳〵と犬死する。心の内の口惜さ。推量して此お願ひ。由良之助様へ申してくれと。現在子なり女房に。手を合しての夫の頼。地病は藥が頼にて本復もござりませうが。敵討の御供は生て歸らぬ死出の旅。夫知つゝも女房の身で。此お願ひに參る親子。憚ながら御推もじ遊ばされ。夫が望をお叶へなされて下さりませコレ平吉。

俱々お願ひ申しやいのと親子額を疊に付。　フシ涙と俱に願ひける。　詞ア、コレ〳〵其樣に額を付ると。新い疊が油だらけに成るわいの。ヱ、始末を知らぬお内儀。コレ始末なされ。始末して小銀が延るときつう命が大切に成て。敵討ふなぞといふ無分別は出來ぬ物じや。そしてマア見る所が美しい御面像。そもじの樣な美しい女房を捨。死ふといふは第一が不心中。其樣な水くさい男に一生連添ふより何と思召す。我等今ではやもめの身分。ナント心に隨ふてくれる氣はないか。コレ。地どふじや〳〵と差寄て。ひつたり濡る俄雨。雨舍なき女房が。フシ身をちゞめてぞ居たりしが。詞ホ、〳〵〳〵あなた樣とした事が。いかにお嬲り有れば迚。わたし等風情をお相手に。御酒狂でもなさそうな。御座興も事に寄る。イヤ座興でない大眞實。女房は有たけれど國に置去今ではもふ朝夕の寢所の上おろし。誰が仕てくれる者もない仕合。そもじさへ得心し給へば今から爰のお内儀樣。銀も有田地も有。そもじが應とさへいや其子も跡取何と〳〵憎ふは有るまいがと。　フシしなだれかゝれば取て突退。　詞いやでござります。渴しても盜泉の水を呑ず。どれ程榮花にくらす共。大恩有る御主人を忘果たるお侍。ヱ、そふいふ心と露知らず爰迄來たが悔しいわいの。口惜いわいの。かういふ所に長居する程身の穢。サア地平吉こいと立上れば。ア、コレ〳〵。　詞何ぼ往のふと思ふても。入口には宵からびんと鎖おろし。鍵は我等が所持致せば。めつたには往なれぬ〳〵。コレ其樣に腹立ずと又分別もしたがよい。ア、今夜はまだ宵。色事は寢る時分から夜が更ると自然と淋しく成て來て。どこやら味な氣に成る物。夫迄我等は奥の間に寢所さして寢て待ふ。色よい返事を夜半迄。待て地居るぞといふ月の。淸きを濁る池水に寫す底意は奥深き襖押明入にける。　フシ跡見送つて女房が。出るも出られぬ籠の鳥。　フシ途方に。くれて居たりしが。詞ヱ、こなた計はそふいふ心で有ふとは思はなんだに。見さげ果たと言ふか。御運拙い判官樣。あの樣な家來をお持遊ばし。嘸や草葉のかげからも。ふがいなし共腰ぬけ共。地思召れんおいとしやと暫し涙にくれけるが。地イヤ〳〵泣て居ては濟ぬ。かういふ所にうか〳〵居たらば。どんなうるさい目を見よふも知ぬ。地サア平吉おじやと立上る。足にぐは

らりと刀の鞘音。詞コレ〳〵まあ刀迄忘れて行ほんにたはいなしと言ふか。何がかういふ性根じや物。敵討氣のないは道理と。地手に取上て打守り。詞ム、侍の刀といへど拔放すは一生懸命。殊に心おくれし由良之助殿。此刀のこひ口を拔かけ。其儘爰に捨置れしには。ム、心有てか。ハテ地ふしぎなと目を放さぬ。刀の鯉口思案の小口フシふさがる胸は幾せの思ひ。詞ソレ最前の上使心元なく。忍んで樣子立聞せしが。判官樣の忘筐。爲若樣の首討と有る上使の難題。のつ引ならぬ手詰の場所。爲若樣の年恰好に似たる我子。お身がはりに立る所存。さながら夫共得いはず。色でしかけて。色よい返事夜半迄。夜半の鐘は上使の刻限。拔差ならぬ刀の鯉口くつろげしは。此子を切てお身がはりに。立といふ心で有たか。ハア、地はつと刀のはんじ物とけて。フシ涙の種となるム、。詞かく迄お主を大切に思ふ由良之助樣。敵討所存がなふて何とせふ。足輕風情の我々なれば疑ひ有るは尤。そふじや。此平吉をお身がはりに殺すならば。夫が願ひも叶ふといふ物。ソレ。地そふじやと刀取上て。見れば頭是もない者の。雅遊びに餘念なき。顏見て何と殺されう。案じた疱瘡もした物を。いかに夫の爲じやとて。親の手にかけ殺すとは。扨もいかなるフシ因果ぞと忍び。涙にくれけるが。地漸々に涙をおさへコリヤ平吉。爰へおじや〳〵。いふ事有と何氣なく。詞マア悦びや。とゝ樣の病も直る願ひが叶ふてきた。コレ何で有ふとのわしがする樣に成て居やるとの。扨も出かしたうい奴と。とゝ樣が譽さつしやる程に。わしが敎へる樣に成て居や。や。アイそんならとゝ樣が出かしたと譽てかや。ヲ、譽てじや〳〵。サア〳〵かゝ樣がする樣にコレ。かう西の方に向ふて。かう兩の手を合して目をふさいでの。なむあみだ佛〳〵。お主樣の御爲。とゝ樣の爲じや程にの。どふぞ佛樣賴上ますといふとの。夫は〳〵有がたい結構な所へ行程に。よふお念佛申しやや。イヤおりや一人行事はいやじや。かゝ樣と一所に往こ。何のわれ一人やらふぞいやい。と樣も追付行しやる。かゝも又。其跡から行わいのふ。モ何にもいふてくれな。聞程胸がはり裂る〳〵と。地しやくり上〳〵涙の限り鳴鐘のフシ數に哀を打ませし。地母ははつと心付。詞なむ三寶早九ツ。地時や過んと胸撫おろし。

我子の後に立廻り。なむあみだ佛とふり上る光は稻妻由良之助其手を取て。詞ヲ、色よい返事滿足々々。得心なれば、こつちへ渡せと。地小脇にかい込かけ入れば。覺悟しながら今更に。いかゞと案じる一間をフシひらき。詞ヤア〳〵九ツの鐘は鳴た。爲若が首受取ふ。早く渡せと大音上。ホ、其首上使へ手渡しせんと。地異義を改め由良之助。首の器を差置ば。はつと驚きかけ寄る母。制してフシこなたに控ゆれば。詞何だ首討たか。ヲ、又殖の生た身がはりじやないかよ。いで地實檢と立寄て。器の蓋を引明れば。首にはあらで百兩包。見るより宅兵衞高笑ひ。ハ、〳〵〳〵。こりや最前の格て。又賄賂で頬はるのかイヤもふ此手じやいかぬ。百兩の目くさり金。地ほしかこまそと取て投捨。詞判官の種を殺さぬからは。問迄もない主人へ敵たふ汝が性根。いで此通り早打にて注進と。地かけ出す宅兵衞やり過し。丁ど打たる手練の手裏劍。眉間にばつしと流るゝ血汐。疼ず引拔打かへす。小柄を片手にしつかと受留。ヲ、詞寺岡平右衞門。天晴忠臣心底見へた。何が何と。ホ、此山科に引籠り長久を計る某。敵を討ざるや。誠の性根を糺さん爲。現在我子の命迄。投出したる心の誠。高知を戴く我々が。及ばざる忠臣義士。地ホ、出かされたり頼もしゝ。此上何か憚らぬ。徒黨の人數の一味連判。是見られよと懷中より。手早に取出す連判狀。小柄の血汐をしつかとすり付。詞足輕寺岡平右衞門。一味同心の血判濟だぞ。ハア、ハア〳〵〳〵有がたし〳〵。女房悦べ〳〵。敵討のお供が叶つた。地ヲ、嬉しうござんしよ〳〵こちの人と手の舞フシ足の踏所。地袴衣裳もかなぐり〳〵。今ぞ寺岡平右衞門と遥。下つてフシかつゝくばふ。地由良之助力彌を呼び。平吉を誘はせ。詞亡君御存生の砌は。國鎌倉と隔たれば。一度の對面せざる其元。あつたらしき忠臣を足輕風情になし置しは。眼有て眼有らざる我誤り。御主君の手を取て。御引合せ下されしか。けふの參會祝着共地滿足共いかで此上有るべきぞ。祿を申さば某とは九牛が一毛なれ共。忠義は拔群勝し其元。由良之助上座は憚りいざ先是へと誠有る。武士の詞に平右衞門。猶もしらすに身を堀埋み。コハ詞有難き御詞。仰られます通り。國隔たればお目見へも致さぬ拙者め。殊に殿樣御切腹の折からは。北國へ

參り。道にて樣子承はり悔り直樣夜を日につぎ。かけ戻つたれば早明屋敷。御家來中もちり〳〵ばら〳〵。是は又なんたる事だと。御門前で腰も膝もどつかりぬけ。直にどん腹かつさばかふとは存ましたれどイヤ〳〵。お國には御家老由良之助樣も有事なれば。宜しい御相談も有そふな物だと。夫を樂しみに漸々宿迄歸りましたれど。高が足輕風情の拙者め。是ぞと思ふ功でもなくば。中々御評議にも加へられまい。どふぞよい仕樣はと存る折から。師直が所巷。新に建る屋敷の結構。此案内を知るならば。地夫が功に成そふな物だと。つてに通傳を求め。漸師直へ奉公には出ましたれど。詞新參者故心を赦さず。あんかんと勤る中こなた樣のお身の上。田地を求藏を建。中々敵討所存はない。剩へ敵師直へ出入迄を願はるゝとの風聞。誠かうそか心ならず。萬一誠ならば。師直より先に討て仕廻ふがよき追善と存じ。及ばずながらこなた樣の御所存を探らん爲。直樣屋敷の隙乞捨。妻子と俱に上京致し今日の此しだら。悴め一人投出した計に。大切な御人數に加へらるゝといひ。由良之助樣の御褒美の御詞。千石萬石の知行頂戴仕たより此平右衞門め身に餘り冥加ないやら有難いやらあつい涙が胸先につゝぱり返り。何共お禮が地ござりませぬとすゝり上れば女房お北。詞是迄つひにお目見へ致さぬ我夫。平右衞門と御知有しは。ヲ、尤の不審。師直よりの上使と僞り主君の切腹其座の模樣。次第逐一聞我より。語る上使の目の内うるみ。面に憤怒を顯はせしは。コレ敵にあらず味方の何某面體しらぬ忠臣と感ずる内。コレ。此平吉と上使の顏。隱しても隱されぬ其儘の生寫し。扨は寺岡平右衞門とナコレ。地某が目のフシ付所。詞ハア、遖なる御眼力。又平右衞門と御存の上多くの金子を給はりしは。ヲ、夫こそ一味の輩へめい〳〵遣はす支度の入用。則亡君割賦の用金。然らば首の器物に入られたる一包。是も割賦の内成や。ヲ、其金邊に落ちらん。尋出して見られよと。地詞にはつと夫婦して。尋さがす一包。爰にと女房がフシ差出す。地夫が取て打守り。詞ム、俗名寺岡平右衞門。佛果の爲と書れしは。ヲ、一味の人數四十餘人。首尾よふ敵討課せば。一人も殘らず皆追腹。其元迚も其通り。亡跡の問吊ひ。此平吉が渴へぬ樣に。ソレ御内證しつかりと地御受

納有れと勇氣たゆまぬ目の内にも。恩愛の別れ思ひやり。ほろりとこぼす一雫。夫婦目と目を。見合して殘る方なき御厚恩。有がた涙身に餘り。はつと フシ大地に倒伏。只伏拜む計なり。詞ホ、暫時の愁に勇氣を挫く我誤り。此山科に有ては。何かの手つがひ心に任せず。是より直に鎌倉へ發足し。萬事の手配あの地で致さん。ヤア〳〵力彌諸士のめん〳〵。用意よくば出達致さん。地はつと諾て立出るは。大工左官と略せしめい〳〵。千崎彌五郎磯合十郎竹森。喜多八原郷右衞門。力彌も倶に フシ旅出立。地寺岡見るより氣もぞく〳〵。詞アヽ各々樣お賴もしい。申しお煙管やたばこ入はござりますか。お荷物がござりますなら。一ツに致して拙者めが引かづいて參りまするでござります。千崎樣。郷右衞門樣。アヽどなたも〳〵おいさましい。ドレ〳〵お草鞋を打て上ませふ。得ては足をくふ物。申し申し喜多八樣ソレ。お合羽に埃がと。地塵打はらひ衿直し。人を賴の追從は。フシ哀にも又いぢらしゝ。地由良之助心を察し。詞寺岡平右衞門。只今より百石の御加增。エイ。ヲヽ役義も改め御近習方。いづれもと同列同格。スリヤ、百石の御知行下され。侍にお引上下されるか。ヲヽ誰憚らず發足あれ。地はつと計に寺岡が。天へも上る心地していさみ立たる。フシ門出の悦び。地妻は名殘を兼てより。惜めど今更目にもるゝ涙の種の平吉が。手を引俱に立か弓。フシやたけ心の。地弦しめす諸士の心も一樣に。涙を隱す由良之助心勵の聲高く。詞アレ〳〵。見られよ旁。太白星晨前に顯はれ。地衆星の光をうばふ時は味方に利有と孫吳が詞。今の天さい其氣に當るは時の吉左右幸先よし。いさんで門出と大星が智略は實にも合詞山。川。萬里にひろまりし。いろはの文字は四十七其。字頭と今の代に。ほまれを殘し名を殘しなごりを殘して。三重へゆく雲の

第九

詞サア苦しくば手を上い。たつてあらがへば證據を出し。拷問の品をかへ己といはす責道具。夫でも白狀致さぬか。

昨夜お召に預りしより責にかゝる此體。高のしれた町人風情。武具馬具はいふに及ばず。くさり帷子飛道具拵へん樣もなし。いか程拷問なさるゝ共。存ぜぬと申すより外にはないか。ヤア〳〵宿屋の町人。二文字金房是へ參れ。コリヤ〳〵こはい事はない。其方が訴し通り。繼梯子と名付し忍び第一の道具。是成義平が賴により。拵へ遣はしたに相違はないか。ハイ密に致しくれとの賴。成程と申ましたれど。餘り心得ぬ道具に付。後日のお咎を恐れましての御訴へ。ヲヽ夫さへ聞ば外に用なし立て〳〵。ヤイ義平。最早叶はぬ。此上に包がいなや。海老責。敷責。箒目といふ責にかくるか。夫でも儕隱しとぐるか。サア〳〵どふじや。斯露顯致せし上は何僞を申ましよ。去ながら又責先により。隱すも祕密商人の代物。賣たり買たり其中で過て行家內の者。それふしぎ迚御詮議に逢。いか程拷問なさるゝ共。打明て申時は。此後私が商賣の妨。ハテ商故に責らるゝ此體。お望次第と　フシ言放せば。詞ヱヽにつくいうぬが頬魂論は無益。そいつ釣れ。はつと立寄いましめの。繩をたぐつて廣庭の。松の立木を拷木に取。ぬかさにやかうと釣上て。何と〳〵と釣繩を上げつおろしつ責せつてう。義平は覺えあらくれし。氣も魂も亂るれど。いはぬ苦痛を片頬に笑て。詞イヤモ一旦存ぜぬと申出した舌三寸。引ぬかれても申さぬと。地立ぬく意路と武士の意路。治郎左衞門聲あらゝげ。詞此儘責てはぬかすまい。女房悴を是へ召寄。目の前で責るならば。うぬが苦しみにこたへ兼女めがぬかすは治定。ソレ義平めが責を赦し。女房悴を連來れと。地差圖におろす釣繩もゆるめど赦さぬ詮議のかせ。來る間遲しと大廣間。頬はしかみの火鉢にかゝり待間程なく　フシ女房おその。地かゝる責苦としらぬ子が。餘念たはひも持遊び箱を。引ずり來る　フシ白洲の內。地かはる夫の憂姿。二目共見もやらずわつと計に泣出す。子は生れ立賢くて。詞とゝ樣なぜに縛られさしやつた。かゝ樣ほどいて下されと。地父に取付泣涙。抱しめふにも手は叶はず。泣な〳〵がせゝ一ばい。目に持涙はら〳〵〳〵。哀をしらぬ治郎左衞門。詞ヤイ女。今儕を召寄しは。義平めが賴れて拵へやつた飛道具。いろ〳〵と責とへど白狀せぬ土性骨。女房の身として知らぬといふ事は有るまい。包ずぬかせと睨付る。地はつ

と涙の手をつかへ。かゝる咎の有ふとはゆめ〳〵存ぜぬ夫の身の上。お上へ對して露いさゝか恐ろしい工事。致そう樣はなけれ共。詞生得堅い主の氣質。未練な言譯致すまじと一筋な心故。お疑ひを受たる不運。地夫の知らぬ一大事私が知らふ樣もなし。たゞ此上のお情には。罪をお赦し下さりませ。詞だまりあがらふ。誂置し先々より訴人したるうぬらが身の上。そふぬかしや又むごい目見せて言してくれう。ヤイ家來共。きやつが脊中を荒繩にてすりたゞし。たぎりし油を流し込憂目を見せよ。地畏つたとあらしこが。ぬがす脊中にあら繩や斯と用意やしたりけん。たぎる油は釜入の。此世からなるあび地獄。油責とは胴欲な。あんまりむごいとかけ寄女房。情用捨も下部共突のけ。跳退かけ流す。血汐と染る油の熟湯。次第に精力勞れ果。見る目いぶせき呵責のせめ目も當られぬ次第なり。地おそのは目もくれ心さへ。詞ノウ義平殿。いかに堅いが常じや迚覺があらばつひ一言。いふて此場の苦患をば。地助る仕樣はない事か。かゝる憂目を妻や子に。見する計が手柄でもござんすまいと取亂し袖や袂に淵なせど。しらぬ我子の手そぶりいとゞ涙に。暮の鐘。あはれ數そふ親と子が。フシ身の有樣ぞいぢらしき。實に大星が契約も。明智に見ぬきし魂は猶金鐵の大丈夫。フシ天晴男の鑑なり。地早暮過る時がはり。入來る石堂右馬之丞。柔和を作れる其勿體。評議の場所に座を構へ。薬師寺殿御苦勞千萬。未だ白狀は致さぬか。さればでござる。今朝より手を盡せど今においてあの通り。是よりは貴殿の役目。何とせうと思召す。何とゝ申さば大切の科人。若侍が手にかけさせ。餘り手ひどく拷問にかけ落命致さば。詮議の種を失ふ道理。ヤイ義平。繩目に及ぶ汝が身の上。まんざら覺ないでも有るまい。先達ていふごとく。新田義貞が家臣畑六郎左衞門が餘類。諸武士をかたらひ歩くとの風聞。當地にも其所縁有る由。去によつて藥師寺殿京都より詮議の役目。某諸共吟味をとゞくる折といひ。右の訴へ汝が身の上彼是以て遁れがたし。其縁類に頼れ拵へたに相違は有るまい。かゝる族に同心すれば梟本にかゝり末代の惡名は遁れず。爰をよく辨へ。其類人を白狀せば一命は赦しくれん。ハア御意ではござれ共此身は勿論。妻子の命も取れまする共。申上る事少もござり

ませぬ。彼等が何にも存ぜぬ事。早く我家へお歸し有て。此身計の御刑罰。地偏に願ひ奉ると。妻子故には兩眼に。涙をうかめ願ふにぞ。詞ヤア石堂殿手ぬるい〳〵。ドレ海老責にしてくれんずと。地立上るを先々暫く。詞只今彼が一言に。妻子をいたはる志是ぞよき詮議の手がゝり。あれ成る悴を。夫婦が中で責ましたら。子に引さるゝ親心。白狀致すまい物でもなし。ヤハ者共。雅き物が手遊び諸共。是へ。地〳〵といとし子の責はいかゞと フシ重る思ひ。詞コリヤ身がいふ事をよく聞よ最前から見る通り。わが親が責らるゝを。雅心に悲しうは思はぬか。イ、ヤ。侍の子といふ者は。泣ぬ物じやと爺樣の言付。ヤ何侍の子。シテ其侍といふ親の名は何と。イヤしらぬ。コレおつ樣。其人形はおれがのじや。兄樣に貰ふたのじや。ナニ兄樣。スリヤ侍の親も有。侍の兄樣も有るとな。サコリヤ。其兄が名は何といふぞ。それもしらぬ。しらぬ。ム、。親も兄も侍。ム、。侍と。地義平を尻目に。石堂が初て胸に差當る。心の劃符。大星が緣に連たる所緣とは知てもしらぬ。フシ此場の時宜。詞ヱ、重々憎い大罪人。事急に責たり共白狀は致すまい。日を追て吟味をとげ。其上は鎌倉の急度御沙汰に行はん。イヤ石堂殿。今宵は御邊の役目といへど。今ちつぺいめが侍の子とぬかした。地夫ぞよき詮議の種と由松が。首筋摑んでぐつと引寄。詞ヤイ義平。儕ぬかさねば此奴が難義。返答次第コレ此火箸の燒鐵。サアどふじや。サア何とヱ、しぶといと。地由松が。坊主天窓に燒印。見るにたへ兼母の親。餘尺もない其體。むごいめ見せる其手間で殺す物なら一思ひ。其子もわしもサア殺しや。殺しや〳〵と取亂す義平は爰ぞ魂の。亂口ぞとくひしばるヲ、望なら此通りと。直にふり上りう〳〵〳〵。鬱くはづみに手の廻り。急所にや當りけん。詞ヤアこりや坊主めはくたばつたか。何と致そふ。地石堂殿と。フシ手持ぶさたに見へにける。狂氣の如く母親は。ヤレ由松よ。詞かはいや〳〵〳〵なア。よふむごたらしう殺された。我子の敵藥師寺殿。喰付てなと此恨。ヱ、これ〳〵義平殿。お前は悲しうないかいのふ。けふを限りになろはしか。いつにないわんばくは。虫がしらして持て來た。地人形所か親にさへ別るゝ事共しらぬ子はさいの河原で只一人無や迷はん不便やと涙の限り聲かぎ

り。なかぬ義平は泣よりも。五臟六腑にしみ渡り。猶も心は鐵石の所存は面に。あらはせり。詞ヤアごくにも立ぬよまい言。ソレ義平夫婦を牢屋へ引け。地石堂暫しと押とゞめ。詞此吟味は只今より某一人越度有る御自分に義平が詮議はさせられぬ。ヤア越度とは何が越度。ヲ、申さず共貴殿の手覺。何故悴は殺し召れた。ヤアいはれな高が科人の小悴。五人十人殺した迚言分ござらぬ。イヤ〳〵科人とは言ながら。彼が口から謀反の餘類と。白狀致さぬ其内は。科人と定ぬは是政道の第一。幼稚といへ共理不盡に殺しては。地無成敗の罪遁れがたし。義平が身の上しるゝ迄は藥師寺殿も科人同然。御遠慮召るが武士の作法。但し返答ござるかな。サア夫は。よもや違變はござるまい。かく申さば石堂が。贔負の沙汰にも思召さふが。いつかなゆるめぬ義平が拷問。ヤイ儕故に藥師寺殿。只今よりは御遠慮めさる。一時成共白狀を。早く致すがあなたの御爲。ナ心得たか。此石堂は太切の役目。譬へ五十日でも百日でも。そちが明りの立迄は某が預り。寢る共ねさゝず現責。地覺悟致せと目に角も此場を立る。フシ情の獄屋。地口を閉たる藥師寺に。かけしおもりの石堂がめぐみも深き。智慧の海底意。隈なき　三重へ夜あらしに

第十

地淺寺の鐘の音さへて夜半の時刻を相圖と定め。忠義の鑑。フシきらめきし。地大星由良之助義兼。亡君の仇を報ぜん爲。一味徒黨の四十餘騎。皆一樣の黑裝束假名實名めい〳〵の袖印に付たれば。螢のごとく見違ふ。光り輝く忠臣の。先手は一子大星力彌。續て千崎矢間重太郎。天川の相詞かけ合せ〳〵。片山源太かけやの大槌。竹森喜多八大鷲文吾。智略の大竹打かたげ。列を亂さず立出る。立川甚兵衞須田五郎奥山岡野川瀨の一黨半弓。手挾立上る。村橋傳治遠松新六。杉野小寺堀井のめい〳〵。中に一際眞先がけ。詞早野勘平光興と。地名乘は石堂縫殿之助。くさり帷子鉢卷も。フシ目立取形鎖長刀。續て寺岡平右衞門案内知たる館の内。原郷右衞門大星瀨平。フシいろはの印眞先に。

地由良之助下知していはく。詞夜討の大事は味方の變。女童に手な負せそ。我々は裏門より相殘る人々は。表門より込入込入。地向ふ者は討て捨逃る者に目なかけそ。詞案内知たる寺岡を先に押立入込んで。天河の聲忘るゝなと。地由良之助に下知せられ。館の内を睨付。天よ河よとかけ詞。相圖の笛を吹合。我も〳〵と一同に込入り込入る　三重〈館の内。地スハ夜討ぞと仰天し。うろたへ廻る裸身の。鎧を着たる後向。兜はくやら小手着るやら　フシさんらん微塵の裏表。地味方は手疵もおはざる達者。敵は油斷を付込れ。叶はじ物と逃るも有。挑燈松明星のごとく畫かと計り　三重〈疑はる。地死物狂ひの働に。フシ雜兵殘らず逃散ば。地取べき首は只一ツ師直を取逃すなと。四方八方かり立れど。行衞知ねば千崎小寺。詞是程にさがしても師直が有家知ざるは。早先達て逃延しと覺たり。我々が武運の盡。神明佛陀に見放されしか。地口惜や殘念や。何面目にながらへん。いづれも切腹〳〵と。皆々一度に座をしむれば。ヤレ早まるなと由良之助。フシ制し兼たる折こそ有れ。地矢間重太郎師直を引立出。詞ヤア〳〵いづれも。柴部屋に隱れしを見付出して生捕しと。地聞より人々いき〳〵と日照に雨をフシ得たるが如く。地由良之助師直に打向ひ。陪臣の我々御館へ踏込しは。主人の仇を報じたさ。尋常に御首を給はべしと相述れば師直ゑせ答ひ。ハ、、、、雀共が囀づたり。此師直に刄は立ぬ。猪狐才すなと拔打に。地切付るを引ばづし。大星も一旦の禮義も今は主君の仇。年月ねらひし恨の刀。詞ヤア〳〵いづれも一太刀づつと。地浮木に逢る盲龜の如く。三千年にあらね共心を盡し。義を盡せし。胸も晴行闇の夜に月の出たる如くにて。わつと計に嬉し泣。フシ理せめて道理なり。地由良之助涙をおさへ。詞是より直に光明寺へ赴き亡君の御石碑へ皆々燒香〳〵と。地詞にハツト立上れば。大星聲かけ。詞コレ〳〵勘平。其方は燒香叶はぬ。トハなぜ〳〵。ヲ、亡君御存命の内御勘當有し早野勘平。某が情によつて君の敵は討せしかど御墓所にて燒香さすは。コレ此位牌の早野勘平。御邊は石堂縫殿之助。生殘つて家相續なさるゝが。御養父の家立といひ。先君の御菩提にも。地此上あらじと大星が情の詞に力なく。昔に返る縫殿之助。死を止るも孝行の道は一筋二筋や。筋引雲の明

近き其夢さむる夢心。地有し次第を白洲の内畫夜わかたぬ拷問に。夢共現天河屋。詞扨は夢で有たよな。四十七人の人々敵の館へ忍び入。師直を討取しと。まざ〳〵見しは正夢か。地ハテ不思議なと思案に心暮六ツ過。鎌倉よりのお飛脚にかけくる寺岡平右衛門。詞ヤア義平殿か悦ばつしやれ。由良之助様大望成就。師直を討取たるしらせの御使。ヤア扨は只今見し夢は。地神の御告成つるかとぞく〳〵小躍フシ悦びあふぞ道理なり。地義平重て館の主石堂殿。拙者をいたはり様々に。責苦をのぶる御情御恩報じは此時と。地奥に向ひ聲はり上。地天河屋義平只今白狀仕ると。地詞に奥より立出る石堂も悦喜の眉。藥師寺諸共フシ立出れば。詞身不肖の某かゝる大事を頼まれしは。定て御存遊ばされん。鹽冶判官の御内にて大星由良之助義兼殿と。地詞に藥師寺悔りせしが。詞ヲ、よふぬかした。由良之助が主の敵を付ねらふ心底。師直殿へ訴へんと。詞に寺岡イヤ申し。藥師寺様とやら。拙者は寺岡平右衛門と申て鹽冶が家來。主人の仇を報はん爲。一味徒黨の四十七人師直が首討取。義平殿へ知せの使ヤア何といふ。スリヤ師直殿は討れ給ふとな。ホ、則大星殿より石堂様へ此御狀と。地渡せば受取納る石堂。藥師寺一人むくりをにやし。詞エ、日かげ者と狀通すれば石堂迚も遁されぬと。地討てかゝるを引ばづし庭へはつたと踏落せば。心得たりと平右衛門ひらりと見へし刀の稻妻。フシ首ははるかに飛ちつたり。地ヲ、手柄〳〵と右馬之丞。詞義平は白狀をせし故に出牢仰付らるゝと。地詞にはつと天河屋返す〳〵も御情。報ぜん様は今の世に。殘れる鑑忠臣の。人の鏡の義平が心。武士の鑑の大星がてり輝きし天下一末世にそれと書遺す

明和三年丙戌十月十六日

高師直
鹽冶判官　太平記忠臣講釋　終

作者　近松半二
三好松洛
竹田文吉
竹田小出
筑田平七
竹本三郎公衛